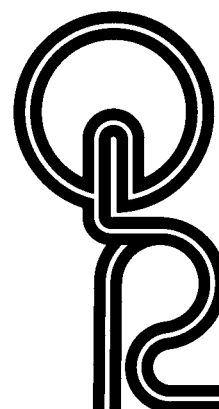


QR Newsletter



第四紀通信

Vol. 28 No.5, 2021



2021年オンライン表彰式にて、各賞受賞者の皆様。左上から横に、石村大輔会員（若手学術賞）、中塚 武会員（学術賞）、平林頌子会員（奨励賞）、石澤亮史会員（若手学術賞）、遠藤邦彦会員（論文賞）、田村糸子会員（学術賞）、岡田 誠会員（学術賞）、川幡穂高会員（学会賞）、中村淳路会員（奨励賞）。2021年8月28日撮影（大会実行委員会）。

Vol. 28 No. 5

October 1, 2021

会長・副会長就任挨拶..... 2	論文賞・奨励賞受賞者報告..... 15
2021年大会開催報告..... 4	2022年大会案内（第1報）..... 19
2021年大会若手・学生発表賞受賞者 報告..... 6	評議員会議事録..... 19
学会賞・学術賞・若手学術賞受賞者報 告..... 6	総会議事録..... 29
	執行部会議事録..... 30
	会員消息..... 31

◆会長就任挨拶 鈴木毅彦



この度、日本第四紀学会会長を務めることになりました鈴木毅彦です。これまでの2期4年間、齋藤文紀前会長のもとで「領域の活動の促進と領域間の調整」および「執行部会・常設委員会のとりまとめ」に携わってきました。この期間は本学会にとり、学会史上最大の変革期であり、領域活動を重視した学会体制への移行化が進みました。領域制がどの程度浸透し学会活動の活性化に寄与しているかはこの先評価されることと思いますが、現段階でも移行化は十分でなく今期も続くと考えています。

領域制導入前、学会員は地質学、地理学、古生物学、動物学などの11分野に所属が分かれていました。この区分は大学の学部学科区分に近いもので多くの会員は迷うことなく自分の分野を選択できたことかと思います。これに対して領域は、研究対象や対象へのアプローチ方法から区分されており、自身がどの領域に属すのか戸惑うところもあるかもしれません。とくに若い会員が入会する際にどこに所属すべきか迷う、という声も聞いたことがあります。ですがそこで自身の関心や目的テーマを再考し、かつ同じ領域内で学部学科を超えた分野が併存することをみて、第四紀学の広さや学際性を感じ取ってもらうことができたらと期待しています。それが第四紀学会の存在意義でもあるからです。

さて、コロナ禍という非日常状態がすでに1年半継続しています。社会に大きな影響を与えたこ

とは言わずもがなですが、会員が一同に集まり研究発表を行い、議論するのが主目的の一つである学会活動にも大きな影響がありました。今振り返ると2020年3月頃から同6月頃にかけては執行部会メンバーも本務先での対応に追われ、第四紀学会としての活動は制限され、8月の大会の先送りを決定するので精一杯でした。その後2020年の年末にオンライン大会が開催されました。この時、予想していたよりも滞りなく進行し、オンライン自体のメリット（時間と距離、それに旅費に制約されない）を強く感じることができました。もちろん学会は講演会場での発表・質疑応答だけでなく、懇親会会場、休憩室、巡検を通して生の議論・情報交換が重要であることは誰もが認めていることかと思えます。しかし再度オンラインになった先日の2021年大会ではスキルに磨きがかかり、オンライン巡検も開催されるなど、十分に満足のいく学会が開催できたと考えています。これも行事委員会、大会実行委員会、オンライン委員会の皆さんのおかげであると感謝します。

来年以降は通常の対面での大会に、オンラインのよい部分を加えたものが実現できればと考えております。来年はこのような形で静岡にてお目にかかれればと楽しみにしています。

就任にあたるご挨拶ですので最後に今期の抱負を述べたいと思います。学会として目下一番の重要課題は領域活動の活性化にあると思います。既に2期4年が経過しています。4年目は、既に述べたとおり新型コロナの影響で領域活動の重要な柱であるシンポジウムや野外巡検の開催が難しい状況でした。しかしオンラインの有効性も見られ少しずつですがこのような形での活動も始まっています。いずれにせよ、領域活動をより活性化させる余地が充分にあり、それを如何に実現していくかが今期にかかっていると考えています。またその他にも、会員数の維持・拡大、『第四紀研究』の充実化、各種制度の見直しなど、検討事項は多岐にわたります。一方で執行部会において認識していない課題もあるかもしれません。すでに見えている課題を改善すると同時に、見えてない問題についても会員の皆様からご意見を頂き、より良い学会へ繋げたいと思います。

◆副会長就任挨拶 北村晃寿



このたび、2021・2022年度の日本第四紀学会副会長を務めることになりました北村晃寿です。2016年度に本会は、体制・選挙制度を大変革しました。この大変革に伴う体制・会則などを検討する「組織改革委員会」が設置され、庶務だった私も参加しました。その経緯で、新体制となった最初の4年間に「第四紀研究」の編集委員長を務めました。本会会則の第2条「本会は第四紀を中心とする諸問題を、関係各分野の協力により解明し、第四紀学の進歩と普及をはかることを目的とする。」を担うにあたり、フラッグシップジャーナル「第四紀研究」の刊行と「大会」の開催は極めて重要な役割を果たします。

2016～2021年度に開催された「大会」の講演数は大きな変動はなかったものの、「第四紀研究」の第54～59巻の総ページ数は、367、273、274、237、396、160となり、年間総ページ数(y)と年(x)の関係の回帰式は $y = -20.1x + 354.8$ 、 $r = -0.44$ で、年間20ページずつ減少したわけです。第58巻は福岡大会の特集号を含み、396ページとなりましたので、同巻を除くと、 $y = -37.3x + 381.6$ 、 $r = -0.96$ となります。さらに、第60巻(2021年)の

総ページ数は約90ページと見込まれ、その値を入れた場合、 $y = -40.9x + 390.3$ 、 $r = -0.97$ となり、2024年には0ページとなります。しかし、次期編集委員会への引継ぎ時に受理論文が3編ありましたから、状況はやや改善されたのではと思っています。こうした状況を踏まえ、編集委員長の期間に、受理原稿の入稿を電子メールでもできるようにしました。また、「第四紀研究」の年間刊行数を6回から4回に削減する一方、「J-STAGE オンライン公開システム」を利用した早期公開を導入しました。これにより、受理原稿は、受理后2ヶ月で公開され、会員の皆様は無料で読めるようになりました。

このように、著者の負担を軽減し、論文のサーキュレーションを向上する方策を実施してきましたが、事務処理の増大に伴う多忙化、グローバル化に伴う国際誌への投稿の最優先化、さらに2019年からの新型コロナウイルス感染症の世界的拡大が合わさり、日本の論文の生産力自体が低下の一途をたどっています。ワクチン接種は進んでいますが、withコロナの状況はまだ続くと思われます。このような状況で、あらゆる学会が学術大会をリモート会議システムで開催するようになり、今後のIT導入の進捗が学会の盛衰の鍵になると思われます。私の役割は執行部会と7つの常設委員会のとりまとめであるので、IT化などによる会務の負担の軽減化に努めたいと思います。その取り組みの一つとして、来年度の大会を静岡で開催することを引き受けるとともに、その大会でリモート懇親会を開催することを“公約”に掲げます。

最後に、私を含め執行部の方針が紆余曲折することもあり、会員の皆様にはストレスが溜るかもしれませんが、世界は高速化・複雑化する一方であり、また執行部の構成員はボランティアでありますから、それらの点にご配慮いただき、会員の皆様には、引き続き、本会の活動にご協力いただけますようお願い申し上げます。

◆副会長就任挨拶 須貝俊彦



2021年から副会長を務めます須貝俊彦です。鈴木会長、北村副会長はじめ役員の皆様とともに学会運営に微力を尽くす所存です。よろしくお願ひ申し上げます。私は主に山地、河川、平野の地形の形成プロセスや成因を研究しています。人文地理学教室助手の時に発生した阪神淡路大震災を契機に産総研へ移り、活断層調査事業に従事しました。約20年前に環境学の教員に転身後、院生らと古環境変動の復元や災害調査も行って参りました。30年間以上、私のような根無し草にも居場所を与えてくれた第四紀学会の懐の深さに感謝しています。研究の多様性や共同研究を尊重する本学会の文化は、戦後復興期の設立理念を受け継ぐものでしょう。日本第四紀学会は、人類が進化した

最新の地質時代を看板に掲げつつ、ローカルからグローバルまで地球表層で生起する多様な事象を総合的に研究するユニークな学会です。このことを、若人に知ってもらふ必要を感じています。湿润変動帯島弧である日本の国土は、世界第一級の第四紀研究のフィールドですし、第四紀研究を通じて、防災や環境保全などの社会課題の解決に貢献する責務があると思うからです。

日本第四紀学会は4年前に5つの領域制に移行しました。私の副会長としての役割は、5つの領域の活動の促進と領域間の調整です。私は領域2「陸上の諸プロセス」の初代表を務めました。各領域がシンポジウムを開催し、新たな活動を始めました。この2年間、執行部から離れましたが、役員の皆様のご苦勞は並大抵でなかったことと拝察します。領域制3期目を迎えますので、学会の多様性を活かした領域横断型の活動を推進したいものです。たとえば、特定の時代や地域（あるいは全球）、特定の社会課題（防災、循環、環境適応等）を旗印に各領域が知恵を出し合う創発的・俯瞰的なシンポジウムはいかがでしょう。持続可能社会の実現という人類共通の新たなミッションを前に、第四紀という時代を知る意義が高まり、第四紀学が果たすべき役割は急増しています。プラネタリーバウンダリーの中で、安全で豊かな社会を実現するために、グローバルな事象の結びつきの発見、地球環境史や人類史からの戦略的な学びが必要です。その役割を担う本学会が益々発展しますよう会員の皆様とご一緒に頑張るべく存じます。

◆日本第四紀学会 2021年大阪（オンライン）大会開催報告

藤原 治（前行事委員長・大会実行委員会）

2021年8月27日（金）～8月29日（日）の3日間、日本第四紀学会2021年大会および関連行事が開催されました。大阪大会は当初昨年8月末に開催予定でしたが、新型コロナ感染対策のため延期となり、今年度改めてオンラインでの開催となりました。

大会の準備は、大会実行委員会（大阪市立大学、大阪市立自然史博物館、国立科学博物館のメンバー）、行事委員会、執行部会から依頼されたオ

ンライン担当とて進めてきました。新型コロナ感染症の終息を期待しつつ、対面とオンラインのハイブリッド型での開催も視野に入れていましたが、最終的にオンライン開催となりました。

ロジスティックスを業者に依頼することも検討しましたが、費用対効果などの観点から、諸準備や遠隔会議システムの操作をアルバイト雇用で対応することとし、例年通り会員の手で大会を実施することにしました。会員、非会員ともに参加費

は無料、講演要旨も無料のPDF版のみとしました。大会の広報のためにプログラム公開を早めたこともあり、320名を越える事前登録がありました（参加者は27日が約280名、28日が約230名、29日が約180名）。

一般研究発表は2日間で28件の口頭発表と22件のポスター発表が行われ、対面で実施していた時と遜色のない数となりました。講演中は常時130名から150名の参加者があり、これは対面開催を上回る数でした。ポスターの展示やコアタイムの議論も遠隔会議システムなどを活用しました。昨年来、オンライン学会が増え、参加者のオンラインでの発表スキルが高く、大きなトラブルもなく、ほぼ時間通りに大会を進行することができました。なお、今大会では、参加登録したけれども事情により講演を見逃した方のために、発表を録画し大会後2日間オンデマンドで視聴できるようにしました。

29日午前には公開シンポジウム「近畿における歴史時代の自然環境」を開催しました。7件の講演が行われ、大阪平野とその周辺の自然とヒトの活動の変遷が紹介されました。

第四紀学会の大会では、開催地の周辺で行う巡検が目玉イベントとなっています。今大会では新たな試みとして、オンライン巡検「大阪の津波碑と地盤沈下地帯」を開催しました。Web上の地図に配置されたポイントをバーチャルに訪ね、写真と動画で解説を視聴するものでした。大変分かりやすい内容で、新型コロナが収まったらぜひ現地

へ行ってみたいと思った方も多かったのではないのでしょうか。

29日午後には2020年学術賞受賞記念講演会を開催しました。北村晃寿会員(静岡大学)による「貝化石・有孔虫化石の複合群集解析による日本本島の島嶼化過程および東海地震の履歴の研究」と題した講演が行われました。北村会員は日本海沿岸に分布する大桑層の堆積相と海生生物化石の解析による海洋環境の変遷の研究で知られていますが、2011年東北地方太平洋沖地震以降は静岡大学に設置された静岡大学防災総合センターのセンター長としても活躍されています。今回は、地質学と古生物学を応用した東海地震・津波に関する研究を中心に講演されました。

本大会に多くの参加者があった大きな理由は、オンライン開催によって出張にかかる時間・労力・コストが軽減できることがあるでしょう。聴きたい発表だけ選んで視聴することで時間効率もよかったのではないかと推察します。一方で、発表内容に対する議論の深まり方や、本学会の特徴である異分野（他分野）の交流に関しては、やはり対面での開催が好ましい気もしました。懇親会が出来なかったことも残念でした。

課題として、今後の大会の開催方法があります。オンライン開催と対面開催にはそれぞれの利点があります。ハイブリッド開催も選択肢ですが、事務局の労力を抑えることも必要となります。大会後に頂いたアンケートの結果も参考にしながら検討していきたいと思えます。



新会長・副会長、2021年大会事務局集合写真（8月29日大会終了時に入室していたメンバーのみ）
上段左から：三田村宗樹（大会実行委員長）、太田耕輔（事務局補助）、井上 淳（大会実行委員）、
中段左から：石井陽子（大会実行委員）、中条武司（大会実行委員）、北村晃寿（副会長）、
下段左から：藤原 治（前行事委員長）、鈴木毅彦（会長）、須貝俊彦（副会長）

◆ 2021年大会若手・学生発表賞受賞者

2021年大会（オンライン）において若手・学生発表賞にエントリーされた発表の中から、若手・学生発表賞選考委員会（加 三千宣委員長、鹿島 薫委員、卜部厚志委員、工藤雄一郎委員、中条武司委員）による選考結果とその後の執行部会での承認により、下記の方々の受賞が決まりました。

■ 口頭若手部門1名（選考対象6件）

受賞者：白濱吉起 会員

タイトル：表面照射年代測定を用いた足摺岬における隆起ベンチの編年

発表者：白濱吉起（産総研）・宮入陽介（東京大）・横山祐典（東京大）・阿部恒平（応用地質）

■ 口頭学生部門1名（選考対象4件）

受賞者：根本夏林 会員

タイトル：宇宙線生成核種 ^{10}Be を用いた南東太平洋（チリ沖）における完新世の古気候復元

発表者：根本夏林（東京大）・横山祐典（東京大）・Adam Sproson（海洋研究開発機構）・宮入陽介（東京大）・阿瀬貴博（東京大）・松崎浩之（東京大）・Yair Rosenthal（ラトガース大）・Samantha Bova（ラトガース大）

■ ポスター若手部門1名（選考対象5件）

受賞者：設楽拓人 会員

タイトル：種分布モデリングによる最終氷期最盛期以降のチョウセンゴヨウの分布変遷に影響を与えた気候要因の推定

発表者：設楽拓人（農工大）・福井俊介（環境省）・松井哲哉（森林総研）・百原 新（千葉大）・津山 幾太郎（森林総研）・大橋春香（森林総研）・田中信行（ENVI）・上條隆志（筑波大）

■ ポスター学生部門1名（選考対象5件）

受賞者：常岡 廉 会員

タイトル：北海道東部、根釧台地上の小規模湿原における完新世の堆積環境の変遷

発表者：常岡 廉（東京大）・横山祐典（東京大）・太田耕輔（東京大）・宮入陽介（東京大）・近藤玲介（東京大）・横地 穰（北海道大）・金子和広（北海道大）・井上 京（北海道大）・紀藤典夫（北海道教育大）・植村杏太（日本大）・隅田まり（GEOMAR ヘルムホルツ海洋科学センター）・百原 新（千葉大）・富士田裕子（北海道大）

◆ 学会賞・学術賞・若手学術賞受賞者選考報告

(1) 選考経緯

日本第四紀学会 2021年学会賞等の候補者の推薦は、2021年2月28日をもって締め切られた。学会賞選考委員会（齋藤文紀委員長、長橋良隆副委員長、遠藤邦彦委員、小野 昭委員、山崎晴雄委員）は、2021年5月13日と17日にオンライン会議を開催し、推薦があった候補者について2021年日本第四紀学会学会賞、同学術賞、同若手学術賞の選考を行った。選考委員会会議においては、推薦のあった候補者について候補者の資格の確認後、日本第四紀学会顕彰規程と関連する内規に基づき、推薦書、各候補者の業績などを参照して審査を行った。また委員の利益相反の確認を行い、該当した1名の委員については該

当する候補者の審議から同委員を除いて審議を行った。以上の結果、学会賞1名、学術賞3名と若手学術賞2名の受賞候補者を決定した。2021年6月28日の2020年度第3回評議員会において、これらの受賞者が決定された。

(2) 受賞者

●学会賞

受賞者名：川幡穂高 会員（東京大学）

受賞件名：海洋コアを用いた古海洋・古気候・古環境に関する一連の研究

受賞理由：

川幡穂高会員は、海洋コアやセジメントトラップを用いた研究などにより、長年にわたり古海洋・古気候・古環境に関する研究を行ってきた。調査海域は、日本周辺のみならず、太平洋からインド洋に及び、周辺の縁辺海を含めて広範囲に及んでいる。川幡会員の最も大きな功績の一つは、日本周辺における古海洋研究を大きく進展させた IMAGES プロジェクトの推進である。後期第四紀を対象とした長尺（～50m）コアの採取を目的とする IMAGES プロジェクトは、PAGES と SCOR の共同プロジェクトとして実施された国際共同研究で、川幡会員は日本代表を15年間務めるとともに、日本周辺海域において備船を行い、日本における古海洋研究を大幅に進展させた。

川幡会員は、海洋コアを用いた研究を行うにあたり、セジメントトラップを用いて現在のデータとの比較や炭酸塩骨格生物の精密飼育実験などを行い、古海洋・古気候の復元に応用できる間接指標を高度化させた。これらにより、より高度化した氷期・間氷期スケールでの海陸の相互作用を明らかにしている。また近年は、陸奥湾、広島湾、東京湾、東シナ海中国沿岸域などから採取したコアを詳細に解析することによって、従来定性的に言われていた温暖化や寒冷化に対して、定量的な海水温の変化を示すことにより、陸域への影響、特に考古学や歴史学に関係する文明との対応や影響への考察に発展させている。特に中期完新世から後期完新世への移行期（4.2ka イベント）における三内丸山遺跡への影響を明らかにした。

川幡会員は、学会の評議員を務め、また日本第四紀学会も参加している日本地球惑星科学連合の理事や会長も歴任している。海洋コアを用いた古海洋研究を発展させ、中心的役割を担ってきた川幡会員の第四紀学への貢献は大きい。

これらの業績からみて、川幡会員の第四紀学および本学会への貢献は高く、日本第四紀学会学会賞にふさわしいと判断する。

<受賞者の言葉> 川幡穂高



このたびは、栄えある「日本第四紀学会学会賞」を授与していただき、誠にありがとうございます。推薦者並びに前会長を含む選考委員の皆様、厚く御礼申し上げます。たいへん名誉なことだと深く感謝しております。

私は、東京大学理学部化学科の無機合成の研究室で卒業研究を行い、次に、海洋研究所で水深6km程度の底層水の放射性核種のラドンを測定し、海底付近の水の混合を研究し修士を終えました。博士課程で地球惑星科学専攻に進学しましたが、学部の授業、実習もほとんど履修し、海底熱水系の研究で博士となりました。公務員試験に合格して地質調査所に就職した後も、資源を研究していたのですが、Ocean Drilling Program の掘削船に乗船した31歳の時に、技術の限界で、これ以上深部の海洋地殻岩が採取できないと悟りました。最初は、大変困った事態と考えましたが、低温での水環境ということで、35歳の時に環境研究に転向しました。

ちょうど大型プロジェクトがあったので、現代の炭素循環に関連して、外洋域でセジメントトラップ係留装置を緯度方向に1万km設置し、沈降粒子の研究を行いました。また、航海の寄港

地が熱帯方面だったので、サンゴ礁の炭素循環も扱いました。併行して堆積物やサンゴ骨格を分析し、古環境研究も行いましたが、現代の環境情報量は過去のそれと比べて1～3桁多いというのが実感でした、そこで、海洋酸性化などの未来予測のため、炭酸塩骨格生物の精密飼育実験を始めました。現代の知見とプロキシの高度化を駆使して、氷期・間氷期スケールでの海陸の相互作用を明らかにしました。

しかし、当時、自分の古環境研究の創意には悩んでおりました。40歳台を終える頃、日本人の祖先に関係した古気候・古環境研究に専念する決意をしました。幸い、アラビア半島、インド、長江沿岸や日本の湾ならびに近海の堆積物コアを分析できました。平城京の都市環境に、現代の環境基準以上の鉛汚染が存在したことは驚きました。最終的に、過去20万年間を対象に、「気候・環境が①日本人の祖先のアフリカから中国経由、日本への旅と、②日本社会の変遷に与えた影響」ということで、まとめることができました。この研究は、人類学、考古学、歴史社会学との分野を超えた研究でしたが、自分でも大変興味をもてました。

資源から環境研究に転向した際には、将来が見通せませんでした。現代と過去の両方を扱えたのは幸せでした。未来の環境を予測するためには、「時の流れ」を考慮することが必須です。「第四紀」の研究は、未来に一番近い「第四紀」を「時の流れ」を中心にすえて解析するという醍醐味があると感じています。

最後になりますが、研究室の卒業生、試料採取や分析を助けて下さった方々、関係者の皆様に感謝申し上げます。

●学術賞

受賞者名：中塚 武 会員（名古屋大学）

受賞件名：樹木年輪の安定同位体比分析を用いた気候変動等の研究

受賞理由：

中塚 武 会員は、近世を始め過去2600年間の樹木年輪の酸素や水素など安定同位体比分析による環境復元を行い、第四紀学の発展に貢献する研究成果を上げてきた。古環境復元に樹木の年輪を用いる方法はかねてから広く行われていたが、特に北欧や北米など、高緯度の環境では降水や温度変化により、成長が律速されていることが多いため、年輪幅を使って古気候復元がなされてきた。

一方、日本を含む中緯度の東アジアや東南アジアなどモンスーン地域は、温暖湿潤な気候のため、年輪幅による定量的な気候復元が困難である。例えば、台風などによって森林の一部が倒木により日光の影響を受けやすくなるなど、直接的には地域の気候を代表しない事象によっても年輪幅が変化することが知られている。そこで中塚会員は、自身の同位体に関する知見を用いて、新たに樹木年輪のセルロースの酸素や水素の同位体分別が気候復元の手法として応用できると見出し、気候復元のプロキシ（間接指標）として提唱した。これまで鍾乳石の研究や降水の分析から知られていた雨量による同位体分別効果のほか、葉からの蒸散作用の強弱による分別が、周囲の相対湿度によってコントロールされていることを明らかにした。

この手法により、奈良県の倒木を使った高時間分解能古気候復元を行い、小氷期の太陽活動が弱かった時期に相対湿度が高かった事実や、東南アジアのラオスの樹木年輪安定同位体がエルニーニョ・南方振動(ENSO)をとらえていることを提唱した。さらに日本各地から収集した多くの樹木を分析し、過去2,000年間のモンスーン強度変化に関連した水循環変動について広く研究を展開するとともに、それらを用いて過去2,000年間の古気候復元研究の国際的なプロジェクトであるPAGES 2kプロジェクトにも大きく貢献した。さらに近年では、先史から近世における歴史事象との対比なども積極的に行いつつ、研究を積極的に発信している。

以上の研究成果のみならず、樹木年輪に関する研究成果は中塚会員が古海洋の研究から大きく樹木年輪の研究に舵を切った後の比較的短期間での成果であるにもかかわらず、多くの国際学術誌や邦文の論文や書籍で発信されており、これらは第四紀学の発展に貢献した優れた学術業績である。

中塚会員のこれら一連の研究業績と活動は、第四紀学と本学会の発展に多大な貢献をしており、日本第四紀学会学術賞にふさわしいと判断する。

<受賞者の言葉> 中塚 武

この度は、栄誉ある日本第四紀学会学術賞を授与して頂き、誠にありがとうございます。ご多忙中にも拘らず推薦・選考して頂いた先生方をはじめ、このような機会を与えて頂いた日本第四紀学会の会員の皆さまに深く感謝いたします。

私は、京大理学部で地鋳教室で三畳系の堆積層に関する卒業論文（1986年）を書かせて頂いた後、進学（のちに就職）した名大理学研究科（水圏研）では外洋の深海底堆積物の窒素同位体比を用いた海洋表層環境の氷期・間氷期変動の研究で博士（理学）の学位（1995年）を頂き、その後、異動した北大低温研ではオホーツク海における国際共同観測に参加して古海洋研究を行う一方で、流氷形成が駆動する中層物質循環のメカニズムを発見（1998～2000年）し、その成果は地球研のアムールオホーツクプロジェクト（2005～09年）の中で、アムール川流域の広大な森林と湿原が植物プランクトンに不可欠な「鉄」を北太平洋全域に供給する、巨大魚付林の構造の解明につながりました。

このように私は、現在の地球環境から第四紀を含む地質時代まで、さまざまな時間スケールの研究を行ってきましたが、その途上の2000年に日本で初めて低温研に導入された有機物の酸素同位体比の測定装置（熱分解元素分析計+同位体比質量分析計）を用いて偶然開始することになったのが、今回の受賞対象である樹木年輪の安定同位体比分析の研究でした。当時の私には樹木年輪の研究経験はなかったのですが、低温研の森林生態学講座の皆さんから地球研の気候適応史プロジェクトのメンバーの方々に至るまで、国内外の多くの共同研究者の暖かいご支援の下、酸素同位体比を用いた年輪年代学の世界最先端の研究を続けて来られたことは大変幸運であったと、心より感謝しております。と同時に、必要に応じて時間スケールや研究フィールドの壁を自由に乗り越えてきた自分の研究スタイルが、新しい研究の推進力になったとも考えております。

樹木年輪の酸素同位体比は、樹種の違いを越えた変動の相同性を示すため、従来から日本でも大きな成果を上げてきた「年輪年代決定」の対象を更に広げる（『酸素同位体比年輪年代法』同成社2021）と共に、「気候変動復元」の面でも気候学や地質学などの理系分野に加えて、歴史学や考古学などの文系分野にも大きな影響を与えつつあります（『気候変動から読みなおす日本史』（全6巻）臨川書店2020-21）。その成果は、多分野を総合した学会である日本第四紀学会の今後の発展にも大きく寄与していけるものと確信しています。

これからもさまざまな分野の皆さまから、ご指導・ご鞭撻を頂きながら、研究に邁進していく所存です。今後とも、何卒、よろしく申し上げます。

.....

●学術賞

受賞者名：岡田 誠 会員（茨城大学）

受賞件名：房総半島の海成第四系を中心とした古地磁気層序に関する一連の研究

受賞理由：

岡田 誠会員は、1989年に房総半島の古地磁気層序と松山逆磁極期とブルン正磁極期との境界（以下では松山・ブルン境界）に関する研究を発表して以降、2006年には銚子半島で掘削されたボーリングコアの複合層序学的研究において、松山・ブルン境界の層位を決定するとともに酸素同位体比層序を示すなど、長年にわたり房総半島に分布する新生界の年代層序や地磁気逆転過程の復元に関する研究に携わってきた。

これらの一連の研究実績から、2013年からはチバニアン国際標準模式層断面とポイント（GSSP）提案チームの代表を務め、提案に必要な古地磁気層序と酸素同位体比の根幹的な研究成果を挙げ、より高精度の層序学的な研究や古海洋学的な研究を推進してきた。特に、松山・ブルン境界の古地磁気層序の再検討を行い、熱消磁により正確な境界を明らかにするとともに、高時間分解能の連続的な古地磁気分析と酸

素同位体比のデータと統合することにより、境界の年代が 772.9ka であること、また 794ka から 748ka の年代区間における松山・ブルン地磁気逆転の全体像の復元に成功している。古地磁気方位は 783ka から 763ka の間に数度にわたって不安定な状態となり、古地磁気強度の減少のタイミングと一致することから、2 万年間にわたって双極子磁場が減衰する間に、非双極子磁場成分が卓越するイベントが存在していた可能性を示した。

また、岡田会員は千葉セクション提案チームの代表を務めてチバニアン の GSSP 認定に導いたとともに、研究体制を組織し、下部・中部更新統境界における日本の研究を、世界を先導する研究にまで高めた。

岡田会員のこれら一連の研究業績と活動は、第四紀学と本学会の発展に多大な貢献をしており、日本第四紀学会学術賞にふさわしいと判断する。

<受賞者の言葉> 岡田 誠



この度は大変栄誉ある日本第四紀学会学術賞を賜ることができ、大変光栄に存じます。推薦および選考に携わって下さった会員の皆様、どうもありがとうございました。また今回評価頂くきっかけとなった GSSP 提案に関わった全ての皆様、さらにこれまでお世話になった多くの皆様に、この場を借りまして深く感謝申し上げます。

この度受賞対象となった研究は、静岡大学における私の学部・修士時代の指導教員であった新妻信明先生が、長年取り組んで来た研究でした。私は卒業研究および修士論文のテーマとして、千葉県市原市に分布する上総層群国本層に記録された松山—ブルン逆転境界の研究に取り組みました。そして地磁気逆転速度を算出するために必要不可欠な地層の堆積速度を正確に見積もるため、上総層群上部層準における有孔虫化石を用いた酸素同位体層序の復元を行いました。その後、東京大学海洋研究所における博士論文では、海洋コアを用いた古海洋学的研究をテーマとしたため、古地磁気学からは一旦離れることになりましたが、1993 年に茨城大学理学部に職を得てからは、古海洋学的研究と合わせ、古地磁気学を研究手段とした研究を進めることになりました。指導学生の卒業研究や修士論文などのテーマの多くでは、松山—ブルン境界よりも古い時代の地磁気逆転記録を求めて、房総半島南端地域に分布する千倉層群や、半島中央部に分布する安房層群などへと研究の対象を広げていくことになりました。

私の研究テーマは、堆積物に記録された地磁気の逆転現象を復元し、それがどのような過程で起こったかを明らかにすることです。さらに地磁気の逆転がどのような影響を環境や生態系に与えたかを明らかにしたいと思っています。そのためには、逆転時の地磁気の振る舞いや、その時の環境変動の情報を、できるだけ高い時間解像度で読み出す必要があります。この研究の過程で、房総半島海成層における磁気層序—酸素同位体層序—生層序の複合年代層序の構築を進めることになり、その結果、房総半島の海成層には、およそ過去 400 万年間にわたる期間に起こった地磁気逆転現象の多くが記録されていることが明らかになりました。房総半島の海成層は、微化石が豊富な上、良好な磁気シグナルを保持しているという極めて稀な性質を持っています。私は、この類い稀な地層に刻まれた様々な記録を丁寧に読み出すことで、地磁気逆転の発生メカニズムや、逆転が環境に与えた影響などについて明らかにすることを目標に研究を進めてまいります。そして今回の受賞を励みとして、第四紀学の発展に貢献できるよう研究に邁進していく所存です。今後ともご指導・ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

●学術賞

受賞者名：田村糸子 会員（中央大学）

受賞件名：中部日本における鮮新世から中期更新世のテフラ対比に関する研究

受賞理由：

田村糸子会員は、中部日本における陸水や海成の鮮新統から中部更新統に挟まるテフラを対象に、テフラの広域対比とその層序学的研究を継続して進めてきた。田村会員の研究の礎になったと思われるのは、石川県から富山県にかけて分布する北陸層群に挟まるテフラの層序と広域対比に関する研究である。この研究では、テフラの層相記載と鉱物構成、火山ガラスと鉱物の屈折率、火山ガラスの主成分・微量成分化学組成を系統的に明らかにし、テフラ対比に基づく遠隔地間（金沢地域・八尾地域・呉羽山地域・魚津地域）の層序対比に加え、中部日本を広く覆う 8 層の広域テフラとの対比を成し遂げた。

その後、田村会員は、新潟・近畿・東海・関東地方に分布する鮮新統から中部更新統に挟まる主としてガラス質テフラの対比を進め、釣部 1—Ya4 テフラ (4.15Ma)、坂井テフラ (4.1Ma)、小鈴谷テフラ (4.0Ma)、谷口テフラ (2.3Ma)、大洞—坂東 1 テフラ群 (2.2Ma)、坂東 2 テフラ (2.1Ma)、高山—Ng1 テフラ (0.3Ma) などの広域対比を行った。テフラの広域対比の研究には、系統的なテフラに関するデータ整備が不可欠である。田村会員は、ICP（誘導結合プラズマ）発光分析法による火山ガラスの主成分・微量成分化学組成のデータセットを構築することにより、類似したガラス質テフラの識別に成功した。また、関東地方の一部で知られていたざくろ石を含む約 2.5Ma のテフラの噴出源が丹沢山地であること、坂東 2 テフラに含まれる大隅石を鍵としたテフラ対比など、テフラに含まれることが稀な鉱物をテフラ対比に活用した。さらに、南房総に分布する千倉層群の鮮新・更新統境界の古地磁気層序と酸素同位体比層序に、広域テフラの挟在層準を位置づけることによるテフラ編年の高精度化への貢献や、テフラ対比に基づく層序対比から、隆起時期や不整合の形成時期などの古地理・テクトニクスに関連する知見も提供している。

田村会員によるこれら一連の研究業績と活動は、第四紀学と本学会の発展に多大な貢献をされており、日本第四紀学会学術賞にふさわしいと判断する。

<受賞者の言葉> 田村糸子



この度は、日本第四紀学会学術賞を授与いただき、誠にありがとうございました。お世話になった皆様、会員の皆様にあつくお礼申し上げます。

私が研究対象の火山灰に出会ったのは 25 年前です。当時、私は高校の教員をしていましたが、専門性を深めるために 1 年間大学で学ぶ機会を得て、東京都立大学の地理学科、地形地質研究室にお世話になることになりました。そこで初めて、ローム層中の箱根東京軽石層 (Hk-TP) を採取・洗浄し、顕微鏡下で観察しました。色とりどりの鉱物が輝いていて、火山灰本来の姿はなんて美しいのだろうと感動しました。さらに、広域テフラ AT の存在を知りました。火山灰は知ってはいましたが、九州から東北まで何百 km も広がっていることや、離れた地域にある火山灰が同じものだと証明する科学的手法も確立され

ていること、共通の同時期面として様々な研究に役立っていること等を初めて知り、こんな面白い研究分野があるのだと眼が開かれた思いでした。この時の感動が火山灰研究へのきっかけとなり、翌年、都立大大学院に社会人入学しました。

私が火山灰研究を始めた頃は、より古い年代の中期更新世、前期更新世のテフラ対比が行われるようになっていった時期でした。この背景には、EPMA による火山ガラスの主成分化学組成に基づくデータが示されたことで、対比精度が向上し、テフラ対比の確実性が増したことがあると思います。はじめの研究では、飛騨高山盆地の中期更新世テフラの広域対比に取り組み、次に金沢や富山に分布する鮮新—更新統・北陸層群のテフラ編年へ、さらに中央日本全体の鮮新—更新統の広域テフラ対比へと、地域的にも年代的にも拡げて研究を進めることができました。この過程では、ICP 発光分析法による火山ガラスの微量成分化学組成の特徴をテフラ対比に用いました。この手法は、産総研の吉川清志さんや水野清秀さんが編み出したもので、火山ガラスの微量成分化学組成の測定も行うことにより、主成分が類似するテフラでも識別ができるというものでした。この微量成分化学組成を用いる手法をご教示いただいたことで、より確実にテフラ対比が出来るようになり、高精度なテフラ編年へと繋がりました。そして現在、他の研究者の方々の成果も含

めると、中央日本の鮮新—更新統の1Ma～5Ma間に、35層に及ぶ広域テフラが識別されています。前期更新世から鮮新世にかけての広域テフラ編年は大きく進歩したと思います。

私は都立高校の教員をしていた時に火山灰の研究を始めました。研究所へ転職するまでの間、研究に費やす時間もなかなか確保できず、厳しい時期もありました。それでも中断することなく火山灰の研究を続けることができたのは、町田 洋先生、山崎晴雄先生をはじめ都立大学地形地質研究室の皆様や、水野清秀さんをはじめ研究仲間の皆様、職場の皆様等々、多くの皆様に支えていただいたおかげです。これらの皆様に深く感謝し、お礼の言葉とさせていただきます。

●若手学術賞

受賞者名：石村大輔 会員（東京都立大学）

対象論文1：Ishimura, D., Toda, S., Mukoyama, S., Homma, S., Yamaguchi, K., Takahashi, N. (2019) 3D surface displacement and surface ruptures associated with the 2014 Mw6.2 Nagano earthquake using differential Lidar. *Bulletin of the Seismological Society of America*, vol. 109, 780-796. <https://doi.org/10.1785/0120180020>

対象論文2：Ishimura, D., Yamada, K. (2019) Palaeo-tsunami inundation distances deduced from roundness of gravel particles in tsunami deposits. *Scientific Reports*, vol. 9, 10251. <https://doi.org/10.1038/s41598-019-46584-z>

対象論文3：Ishimura, D., Hiramane, R. (2020) Proximal–distal fall deposit correlation of VEI - 5 tephra (Towada - Chuseri) from Towada volcano, northeast Japan. *Journal of Quaternary Science*, vol. 35, 334-348. <https://doi.org/10.1002/jqs.3161>

受賞理由：

石村大輔会員は、変動地形学・第四紀地質学的手法に基づき低頻度巨大自然現象の解明とそれにより引き起こされる災害の軽減に取り組んでいる。今回の受賞対象である3編の論文は、活断層、津波、テフラを対象とし、詳細な現地調査に加え、新規の手法を適用したフィールドに基礎をおいた研究であり、石村会員の研究の多様性と発展性を示している。

対象論文1は、地震前後の数値標高データを用いてPIV法を適用することで、2014年長野県北部の地震による地表変位を面的に可視化したものである。本論文では、現地における計測・観察から解析結果の精度検証も行い、地震に伴う変位量分布や極浅部の断層形状を推定し、変位量分布を高精度に明らかにすることで、手法開発が進んでいるリモートセンシングによる地震時変位量計測手法の1つとしてのPIV法の有用性を示した。

対象論文2は、画像解析に基づき津波堆積物中の礫の円磨度を計測し、礫の給源および複数の給源からなる礫の混合比率を定量的に求めたものである。さらに浸水距離が既知の津波堆積物の混合比を各浸水距離で規格化することにより、津波の規模によらずに混合比の割合が同様の傾向を示すことを明らかにした。この関係性を用いることで、規模推定が困難であったリアス海岸に分布する津波堆積物の情報から浸水距離を推定し、津波堆積物研究に新たな可能性を示した。

対象論文3は、十和田火山給源の十和田中振テフラを構成する各噴火ユニットの分布と層厚を火山ガラスの屈折率・主成分化学組成を元に明らかにした研究である。詳細な分析により、各噴火ユニットの識別方法を示した上で、遠地における数cm～数mmのテフラの対比を行った。これは活断層や津波堆積物の調査中に発見・分析されたものであり、石村会員の研究の多様性が生んだ成果である。

石村会員のこれらの論文は第四紀学の発展に貢献する優れた学術成果と認められることから若手学術賞にふさわしいと判断する。

<受賞者の言葉> 石村大輔

この度は、日本第四紀学会若手学術賞という栄誉ある賞をいただき誠にありがとうございます。今回評価いただいた3本の論文は、活断層、津波、テフラを対象とした論文です。私自身、1つの研究対象というよりも多岐にわたる研究を実施することが私の研究スタイルだと考えており、



若手学術賞をいただいたことで自信を持つことができました。

時系列で言うと、津波とテフラの研究を学位取得後の千葉大学の特任研究員でスタートさせ、東北大学、東京都立大学と継続してきました。その間に2014年長野県北部の地震が発生し、この地震を対象とする研究を行いました。この期間、お世話になった先生方には自由に研究させていただきました。また、多くの学生さんにお手伝いいただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

対象論文1の長野県北部の地震に関しては、地震前後の地形データの差分解析を行った研究です。私の専門としない部分も多く、論文執筆や査読対応が大変でしたが、共著者のサポートと激励により掲載に至りました。現在の技術では、現地に行かなくとも様々な手法によって断層の位置やその変位量を知ることができます。そのような中で本

研究が1つのケーススタディとして今後の研究に役立てればと思います。

対象論文2に関しては、三陸海岸小谷島の津波堆積物の礫形状に着目した研究です。2015年に初めて小谷島の津波堆積物の論文を執筆したときから礫の形状に基づき給源を推定していましたが、定量的に礫の形状を議論できないかと考えていました。そのような中で画像解析に着目し、共著者の山田圭太郎さんと夏休みの自由研究と銘打って、夏の京都で部屋にこもって礫を並べました。その後、円磨度計測のコードが公開されたことを契機に具体的な研究に変わっていき、最終的には合計10万個を超える礫を並べることで本論文に至りました。論文執筆の際も、様々な議論を行い1年ほどかけて投稿しました。今までの私の研究の流れとは大きく異なったので苦労したことも多かったですが、良い経験を得ることができました。

対象論文3の十和田中掘 (To-Cu) テフラに関しては、三陸海岸での津波堆積物研究中に多くの地点でTo-Cuを確認し、詳細な分析により給源における3つの降下ユニットが広域に対比可能であることがわかりました。その後、都立大では、火山ガラスの主成分化学組成を測定することが可能になり、化学組成を加えて議論を行い論文執筆を行いました。また長野県北部の地震に関する調査で行った青木湖のピストンコア中にもTo-Cuを見出すことができました(第四紀研究56巻6号)。検鏡観察や火山ガラスの屈折率からTo-Cuであると自信を持っていましたが、都立大での化学組成の測定により確信を得ることができました。それまでの経験やタイミングがうまく合わさった結果だと思えます。

今後は、自身の研究を深めるとともに若い世代の研究者が自由な発想で研究や議論を行える機会や場を提供できるように努力していきたいと思っています。

●若手学術賞

受賞者名・石澤堯史 会員 (東北大学)

対象論文1: Ishizawa, T., Goto, K., Yokoyama, Y., Miyairi, Y. (2019) Non-destructive analyses to determine appropriate stratigraphic level for dating of tsunami deposits. *Marine Geology*, vol. 412, 19-26. <https://doi.org/10.1016/j.margeo.2019.02.009>

対象論文2: Ishizawa, T., Goto, K., Yokoyama, Y., Goff, J. (2020) Dating tsunami deposits: Present knowledge and challenges. *Earth-Science Reviews*, vol. 200, 102971. <https://doi.org/10.1016/j.earscirev.2019.102971>

受賞理由:

石澤堯史会員は過去の津波や地震の履歴復元に関する研究を大学院の頃から継続して実施し、フィールドでの細かな堆積学的な観察、実験室での細かな分析作業、そしてそれらのデータの統計的な解析を組み合わせた研究により、津波堆積物の高精度な年代決定を行う手法を提示した。今回対象の筆頭論文2本のうち、論文1とそれ以前に国際誌に公表してきた2本の論文を取りまとめ、津波堆積物の年代決定に関して幅広く現状と課題を示したのが論文2である。

石澤会員は、これまでに津波堆積物を挟む上下の連続的な年代値と層序を考慮したベイズ統計を扱うことにより、より正確な津波堆積物の年代が得られること、津波の侵食によって剥ぎ取られ、リップアップクラストとして津波堆積物に取り込まれた地層の年代をクラストの層位を考慮して連続的に測定することにより、年代の欠損を補完することができ、より正確な津波の年代が明らかになることを示してきた。

対象論文1は、津波堆積物の直上に存在するマッドキャップに着目し、コアスキャナーを用いて蛍光X線(XRF)やCT、そして色彩などの変化を系統的に検討し、正確にマッドキャップを識別することができることを明らかにした。これにより、津波の浸水域や津波直後の年代決定の精度を向上できることを示した。

対象論文2は、放射性炭素年代測定のみならず他の手法も用いた幅広い津波堆積物の年代決定法の現状と課題について検討している。特に、放射性炭素年代決定では用いる試料の選別や、上記の論文に示されたような層序学的な検討が必要であること、更に津波堆積物によっての地層欠損や津波堆積物の層厚を考慮してベイズ統計を扱うことが有効であることを示し、より正確な津波堆積物の年代決定を行うための手法をとりまとめている。

石澤会員のこれらの研究成果は、第四紀学の発展に貢献する優れた学術成果と認められることから、若手学術賞にふさわしいと判断する。

<受賞者の言葉> 石澤亮史



この度は日本第四紀学会若手学術賞という荣誉ある賞を頂き、大変光栄に存じます。受賞できた嬉しさと同時に身の引き締まる思いを感じております。受賞理由にもありますように、今回の受賞は私が大学院生の頃から取り組んでいる津波堆積物の年代測定に関する一連の研究が評価されてのことです。津波堆積物研究における年代測定は津波の発生頻度推定や津波堆積物の年代対比に基づく津波の規模評価など、古津波履歴を復元するために極めて重要であり、そのような年代測定に関する研究が高く評価されたことが大変嬉しく思います。今回受賞対象となった一連の研究について指導教官として暖かくご指導頂いた東北大学災害科学国際研究所の後藤和久先生（現在は東京大学に異動）、放射性炭素年代測定に関してご指導頂いた東京大学大気海洋研究所の横山祐典先生と年代測定の技術的な部分でご指導・ご助力

頂いた宮入陽介博士を始めとする横山研究室スタッフの皆様、さらに全ての共同研究者・関係者の皆様にこの場を借りて御礼申し上げます。

受賞対象となった私の研究はいずれも津波堆積物の年代測定に関わる論文です。沈み込み帯で発生する巨大地震津波の頻度は数百～千年に一度と言われています。この頻度は我々人類にとっては長いものかもしれませんが、暦年校正した放射性炭素年代測定結果の誤差幅から見ると非常に短期間であり、単に年代測定するだけでは必要十分な精度で津波堆積物の年代を推定できませんでした。今思い返してみると、私がこの問題に取り掛かっている前後で放射性炭素年代測定のベイズ推定技術の開発が進み、特に年代-深度モデル作成の面で大きく進歩したことは大変幸運なことであったと思います。このベイズ推定を用いた年代-深度モデルを津波堆積物研究に適用することを目指し、私が最初に実施した研究は、津波堆積物を間に挟む泥炭層のmm間隔での高解像度年代測定でした。そのような多点数の年代測定は一介の学生には大よそ実施不可能と考えられるものですが、前述の多くの方々のご助力のもと成し遂げることができました。この高解像度での年代測定とその結果を用いたベイズ推定は現在の私の研究の礎となっております。

今回受賞対象となった研究が津波堆積物研究の年代測定法を検討する際の一助となり、より精度・確度の高い古津波履歴の復元が実施されることを願っております。今回の受賞を励みに、引き続き第四紀学の発展のため尽力していく所存です。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

◆論文賞・奨励賞受賞論文・受賞者選考報告

(1) 選考経緯

2021年日本第四紀学会論文賞ならびに日本第四紀学会奨励賞の会員からの推薦は、第四紀通信第26巻6号(2020年12月)で募集され、2021年2月28日に締め切られた結果、論文賞・奨励賞に対して会員からの推薦はなかった。2020年度論文賞選考委員会(百原 新委員長、奥野淳一委員、高田将志委員、箱崎真隆委員、山田和芳委員)は、選考日程と進め方の確認を行った上で、日本第四紀学会顕彰規程および論文賞・奨励賞選考に関する内規にもとづき各賞の候補論文の選考を進めた。本年度の該当論文は58巻(2019年)および59巻(2020年)の第四紀研究に発表された会員を含む論文のうち論文賞対象論文32編、奨励賞対象論文5編で、これらのすべての候補論文を対象に選考が行われた。4月13日に選考会議を開催し、委員全員の評価が得られた論文賞候補1編および奨励賞2編の推薦を決定した。2021年6月28日の2020年度第3回評議員会において、これらの受賞論文・受賞者が決定された。

(2) 受賞論文・受賞者

●論文賞

受賞者名：遠藤邦彦会員、千葉達朗会員、杉中佑輔会員、須貝俊彦会員、鈴木毅彦会員、上杉 陽会員、石綿しげ子会員、中山俊雄会員、舟津太郎会員、大里重人会員、鈴木正章会員、野口真利江会員、佐藤明夫会員、近藤玲介会員、堀 伸三郎 会員

受賞論文：論説 遠藤邦彦・千葉達朗・杉中佑輔・須貝俊彦・鈴木毅彦・上杉 陽・石綿しげ子・中山俊雄・舟津太郎・大里重人・鈴木正章・野口真利江・佐藤明夫・近藤玲介・堀 伸三郎(2019) 武蔵野台地の新たな地形区分, 第四紀研究 58巻6号, 353-375頁.

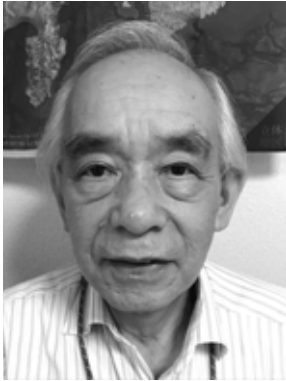
受賞理由：

本論文では、国土地理院5m数値標高モデルを活用した1m等高線レベルの地形図やレインボーコンターマップなどの新たな地図表現手法を活用し、併せて、大量のボーリングデータ解析結果と照合することで、地形面を構成する地下構造との関係を含めた武蔵野台地を中心とする新しい詳細地形区分が提案されている。日本の高度経済成長期以降、東京～横浜の周辺地域では、各種の地形・地質調査や関連する第四紀学的研究が多数行われ、とくに武蔵野台地とその周辺地域は日本の台地地形研究の模式的役割を果たしてきた。そして、日本の第四紀研究に多大な貢献をもたらしてきた。このような背景の中、本論文が、オリジナルなデータ解析結果から導かれる新しい主張を加えながら、現時点での新しい武蔵野台地形成史の捉え方と今後の研究課題を整理・提示することで、日本の第四紀研究に示唆を与え、大きな刺激を与えた。また、世界屈指の大都市東京の基盤を構成する武蔵野台地とその周辺地域の地形・地質は、人工改変によってその姿を急速に変えつつあるが、それらの改変前のオリジナルな情報を記録・整理し、総合的に解析・分析することは、科学的アーカイブとその活用という点からも極めて意義深く、将来に向けた学術的貢献度も高い。筆頭著者の遠藤邦彦会員や共著者の上杉 陽会員など、日本の高度経済成長期の武蔵野台地のフィールド調査に直接関わった研究者に加え、近年のデジタル情報・ビッグデータの解析に精通した千葉達朗会員や、個々の具体的な調査研究を中心となって推進しているその他の若手・中堅会員の方々など、多彩な著者グループの顔ぶれをうまく生かし、重要な既存研究にも丁寧に目配りし取りまとめている点も、共同研究の利点をうまく生かした論文として大いに評価できる。

以上の諸点から、本論文は第四紀学の発展に大きく寄与すると期待され、本学会の論文賞にふさわしいと判断する。

<受賞者の言葉> 遠藤邦彦

この度は栄誉ある日本第四紀学会論文賞をいただき、著者を代表して心から感謝申し上げます。研究対象とした武蔵野台地の地形・地質は、古くから多数の研究者が取り組み、日本のタイプと



しても扱われました。しかし、現在では地表面や多くの露頭は人工物に覆われ、地形自体を見ることができません。私たちが生活する土地の地形や地層を見ることができないのは大きな問題です。さらに、少なからぬ露頭、遺跡発掘や工事現場などでの地層の観察記録も今や埋もれ、次世代に伝わらない恐れが強まっています。

一方、航空レーザー測量等の進展により、詳細な地形情報を取得できるようになりました。さらに東京都では大量のボーリングデータを公開しており、自前のボーリングデータを加えると 23 区内で数万本のデータが利用可能です。

こうした背景の中で、最初のステップは国土地理院数値標高モデルの活用でした。佐藤氏の協力により研究室に GIS を導入しました。次に千葉氏開発の赤色立体地図、杉中・堀・野口氏開発の RCMaP、そして 1m 等高線図の組合せにより、従来のレベルとは異なる地形区分を進めました。

さらに、堀氏、杉中氏、石綿氏、および中山氏の協力を得て行った大量のボーリングデータの解析結果は、武蔵野礫層上面高度のギャップを捉えるのに貢献しました。

段丘礫層上面の縦断面の比較など、地形学的検討は須貝氏、舟津氏によってなされました。金子台や所沢台が古い扇状地であることは、鈴木毅彦氏等によりクリプトテフラに基づき明らかになりました。本研究では、短冊状の河岸段丘状扇状地の年代決定が重要でしたが、上杉氏等の遺跡調査関連のテフラ研究成果が大きな意味を持ちました。さらに、国分寺崖線に沿う段丘面や本郷台地などの区分や年代については大里氏、近藤氏、鈴木正章氏の協力が不可欠でした。他にも多くの既存フィールドデータをできる限り集めて整理し、検討しました。

1m 等高線の分解能による地形区分から見えてきたことは、従来のデータの多くは、段丘面の縁にあたる崖沿いにあり、平坦面の縁にはしばしば短冊状の地形が区分されます。それはボーリングデータで確認できます。一方地形区分は地形面の平坦部が基準になります。その結果、短冊状の地形面の意味を正しく捉えることができます。

このように、地形解析の立場、ボーリング解析の立場、地形理論の立場、テフラ・堆積物データの立場、年代測定の立場などからの情報を、1m 精度の地形区分を基礎として、統合することができたと考えています。

その意味で多くの研究者の協力があってこそこの論文であり、評価していただいたことは私どもにとってこの上ない喜びです。

●奨励賞

受賞者名：平林頌子 会員（東京大学）

受賞論文：平林頌子・横山祐典(2020)完新統/完新世の細分と気候変動. 第四紀研究 59 巻 6 号, 129-157 頁.

受賞理由：

本論文は、放射性炭素を使った多様な研究成果により本学会若手学術賞を 2020 年に受賞した筆頭著者らによって発表されたもので、2018 年に決定された完新統/完新世の時代細分の詳細と 8.2 ka と 4.2 ka のグローバルな気候変動イベントとの関連について、詳細にレビューされている。一般的に、完新世の古気候学記録は、陸・海洋から数多く報告され、空間的に幅広く高時間分解能の記録が取得されている。さらにその解析や解釈、アプローチの方法などに至っては、多岐にわたる研究手法を駆使して行われている。このため、それらを普く包含するレビューは大変難しい。しかし、本論文では、氷床コア、サンゴ礁、海底堆積物、石筍、樹木年輪といった古気候アーカイブの詳細から、気候モデルを用いた定量的なメカニズム研究にまで踏み込み、全球の変動と地域別の変動、およびそれらのリンケージについて、多数の論文成果を精査した上で丁寧にまとめられている。完新世は、古気候のみならず考古学的資料も得られるため、文明の変化・崩壊と関連させた考察もなされ、さらに現在の気候変動との比較を通して、将来予測へとつながることから、社会科学的にも重要な研究対象となる。人類の影響が顕著になる人新世への気候変動の

変遷（自然起源から人為起源）をたどる上で、今後さらに注目される完新世研究に対し、筆者自身の研究成果に基づくさらなる貢献が期待される。本論文が示した現在の完新世研究の現状は、今後の第四紀学の学術上の進展を見据えた指針となるばかりではなく、これから第四紀学を志す若手研究者に対して、研究の端緒をつかむための論文としても有用であり貴重な成果である。このような成果は、日本の第四紀学・古気候学の発展に確実に寄与することから、本学会の奨励賞にふさわしい論文と判断する。

＜受賞者の言葉＞ 平林頌子



この度は、栄誉ある「日本第四紀学会奨励賞」を賜り、大変光栄に存じます。このような賞を頂いたのは、本論文の共著者であり、また学生時代よりご指導いただいております東京大学大気海洋研究所の横山祐典教授をはじめ、本論文に対する有益なコメントをくださった2名の査読者の方々、立命館大学の中川 毅教授、静岡大学の北村晃寿教授、編集委員の方々の御助力のおかげであると思っております。この場をお借りして、深く御礼申し上げます。

この論文は、2018年に国際地質科学連合国際層序委員会により決定された、完新統/完新世の時代細分と、その区分の根拠となった完新世の急激な全球規模の気候変動イベントについてまとめた論文です。完新世の古気候学記録は、幅広い空間分布において、高時間分解能のデータが報告されています。古気候復元に使用されている試料は、氷床コア、サンゴ骨格、海底や湖沼堆積物、石筍、樹木年輪と多岐にわたります。私自身の研究はおもにサンゴ骨格をはじめとした炭酸塩試料を用いた古気候復元を行っており、これまでサンゴ骨格の化学分析によって復元された結果を、先行研究によって報告された気候変動と比較しながら議論をすすめる、というスタイルで研究を進めてまいりました。今回、このような完新世の気候変動イベントのレビュー論文を執筆する上で、改めて様々な古気候アーカイブを用いて完新世の気候変動を復元した多くの論文を勉強させていただき、多くの研究者たちによって復元された古気候学・第四紀学研究データの素晴らしさに感銘を受けました。また、この複雑な地球環境変動システムを理解するためには、多くの研究者によって復元された古気候データをコンパイルし、局地的な気候変動から全球的な気候変動まで、気候モデルも用いて包括的に議論することが重要であると再認識いたしました。

私にとりまして、今回の受賞は、昨年度の日本第四紀学会若手学術賞に引き続いての受賞となり、大変身の引き締まる思いです。2018年に学位をいただいてから丸三年が経ち、私自身も、第四紀の気候変動を復元する研究者の一人として、諸先輩方のように第四紀学の発展に貢献できるよう、今回の受賞を励みとし、より一層精進して研究を進めてまいりたいと思う次第です。今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしく願いいたします。

最後になりましたが、本論文の執筆の貴重な機会を与えてくださった琵琶湖博物館の里口保文博士、本論文を評価していただいた選考委員の方々、学会関係者の皆様にもこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

●奨励賞

受賞者名：中村淳路 会員（産業技術総合研究所）

受賞論文：中村淳路・澤井祐紀・松本 弾・谷川晃一郎・伊尾木圭衣（2019）北海道霧多布湿原一番沢における津波堆積物の分布. 第四紀研究 58 巻 4 号, 303-312 頁.

受賞理由：

本論文は、北海道東部太平洋岸の津波堆積物に関して、地質調査と年代測定によって、その分布限界を明らかにした研究成果である。本研究によって、千島海溝で発生した巨大地震の津波堆積物が、先行研究で報告された地点よりも約 1km 内陸まで分布することが初めて示された。津波堆積物と沈み込み帯の巨

大地震の関係を決定づけた地域での新しい知見は、今後、巨大地震にともなう津波の実態をより定量的に明確にできる可能性が高い。また、この知見は、津波の数値シミュレーションにおける断層モデルの構築において、新たな制約条件となる可能性もあり、防災、減災の観点からみても極めて重要なものといえる。

なお、本論文は短報であり、当然のことながら論説に比べて、ボリュームに欠ける部分はある。ただ、それを補って余りある重要な知見が示されており、この成果をもとに、さらなる研究の発展が期待される内容となっている。以上の理由より、本学会の奨励賞にふさわしい論文と判断する。

<受賞者の言葉> 中村淳路



このたびは、日本第四紀学会奨励賞をいただき、誠にありがとうございます。論文の執筆にあたっては多くの方々のお世話になりました。共著者の皆様には野外調査から試料の観察・分析、結果解釈のディスカッション、原稿の推敲に至るまで、大変お世話になりました。査読者の方々、編集委員の皆様からは多くの有益なコメントをいただきました。また、これまでご指導をいただきました全ての先生方に深く感謝致します。

本研究の調査地域の北海道霧多布湿原は、これまでの多くの研究により、津波堆積物の研究が最も進んだ地域の一つとなっています。そのような霧多布湿原ですが、湿原南部に位置する一番沢は調査が手薄な場所となっていました。そこで本研究は、必ずしも十分な調査が行われていなかった一番沢の奥部で津波堆積物の調査を行いました。その結果、先行研究による報告よりも約1 km内陸側にも津波堆積物が分布することが明らかとなりました。この結果は、津波の数値シミュレーションにおける断層モデルの構築の際、新たな制約条件となる可能性があります。

霧多布湿原は景色が雄大で、調査が大変楽しい場所です。一方、地形図や航空写真で見ると近そうに見える距離でも、調査機材を担いでぬかるんだ湿原を歩くとすると、苦勞もありました。調査地点までのアクセスも、尾根上に舗装のされていない林道があるとは言え、決して簡単なものではありません。共著者の皆様のこれまでの現地での経験と、協力・団結して行った野外調査によって成り立った研究ですので、このような賞をいただき、大変嬉しく思っております。

この調査は津波堆積物の分布限界付近での調査のため、試料の記載にあたっては特有の難しさもありました。それは同一地点で複数の柱状試料を採取すると、砂層の有無や砂層の厚さが異なることがあるということです。本論文では、このような複数の柱状試料について、解釈を含んだ単一の柱状図とはせず、複数の柱状図を並べることで、同一地点で実際に観察した堆積物の見え方の多様性を表現することとしました。賛否両論があるかもしれませんが、実際の記載結果を残すということにおいて意味があることだと考えています。

この奨励賞は今後必要な努力を含めていただけた賞だと思いますので、これからも第四紀学の発展に貢献できるよう頑張っていきたいと思っております。

◆日本第四紀学会 2022 年大会案内 (第 1 報)

2022 年大会は以下の概要にて開催の予定です。
但し会場予約などの事情で日程変更の可能性もあります。

日程：2022 年 8 月末頃を予定

会場：静岡県地震防災センター

大会実行委員長：北村晃寿 (静岡大学)

実行委員：中西利典 (ふじのくに地球環境史ミュージアム)、西岡佑一郎 (ふじのくに地球環境史ミュージアム)

◆日本第四紀学会 2021 年度第 1 回評議員会議事録

日 時：2021 年 8 月 26 日 (木) 10:00 ~ 13:00

方 法：Zoom システムを用いたオンライン会議

出席者：鈴木毅彦 (会長)、北村晃寿 (副会長)、須貝俊彦 (副会長)、オブラクタ スティーブン フィリップ、久保田好美、加 三千宣、坂下 渉、田村 亨、平林頌子、吾妻 崇、石村大輔、奥野 充、荻谷愛彦、久保純子、佐藤善輝、丹羽雄一、藤原 治、堀 和明、青木かおり、卜部厚志、岡田 誠、菅沼悠介、長橋良隆、兵頭政幸、水野清秀、井上 淳、江口誠一、工藤雄一郎、齋藤めぐみ、高原 光、中塚 武、那須浩郎、百原 新、石原与四郎、小荒井 衛、前杵英明、三田村宗樹、目代邦康、山田和芳 (以上、評議員)；計 39 名

欠席者：宍倉正展、海部陽介 (議長委任)、植木岳雪 (以上、評議員)

オブザーバー：齋藤文紀 (前会長)、小野 昭 (名誉会員)、奥村晃史 (前領域 2 代表)、横山祐典 (前領域 1 代表)

藤原 治前行事委員長の司会で、鈴木毅彦会長の挨拶があり、定足数の確認に続いて、2021 年度評議員会議長を久保純子評議員、議長代理を岡田 誠評議員および長橋良隆評議員とすることが承認された。以降、北村晃寿副会長が資料の提示をしながら、久保議長の司会で議事が進行された。議事終了後、北村副会長の挨拶で評議員会は閉会となった。

(1) 2020 年度事業報告

資料 1 に基づき、2020 年度事業報告が各担当責任者の前委員長・領域代表 (欠席の場合は新委員長・領域代表) から報告された。

(2) 2020 年度決算報告・会計監査報告

資料 2 に基づき、齋藤めぐみ会計委員長から決算報告が、また、2020 年度会計監査報告が 2019-2020 年度会計監査・久保純子会員からそれぞれ報告された (この間のみ、司会は岡田 誠議長代理)。なお、会計監査からは、会費は前納制であり請求時期を早める、予備費は最低限 1 年分の活動費程度としたほうがよい、繰越金は最大 1 年分の活動費程度に抑えたほうがよいが現在の繰越金の余裕は新型コロナウイルスの影響による一時的なもの、などのコメントが出された。

(3) 2021 年度事業計画

2021 年度事業計画が、資料 3 に基づき担当の新委員長・領域代表 (欠席の場合は前委員長・領域代表) から提案され、賛成多数で承認された。なお、「第四紀研究」印刷刊行と J-STAGE での受理論文早期公開の時間的なバランス、「第四紀通信」の発行頻度、会員メーリングリストでの配信情報のホームページでのアーカイブ化などに関するコメントがあった。

(4) 2021 年度予算案

資料 4 に基づき、2021 年度予算案が齋藤会計委員長から提案され、賛成多数で承認された。

(5) 顕彰規程及び関連する内規の改訂案

顕彰規程及び関連する内規の改訂案が水野清秀庶務委員長から提案され、特に論文賞と奨励賞の扱いについて多くの議論がなされたが、具体的な文案の修正までには至らず、今後、顕彰規程等の改訂に関する検討委員会（特別委員会）を設置して検討することとし、特別委員会の設置は承認された。

(6) 2021-2022 年度役員（会計監査）・委員の選出・承認

2020 年度第 3 回評議員会で承認された領域代表及び常設委員会委員長を除く 2021-2022 年度役員（会計監査）・各委員会委員（資料 5 の下線を付した会員）に関する説明が水野庶務委員長から行われ、賛成多数で承認された。

【資料 1】

2020 年度事業報告（2020 年 8 月 1 日～2021 年 7 月 31 日；一部 2021 年 8 月中旬までの経過報告）

1-1 庶務委員会（委員長：水野清秀）

- 1) 総会（1 回）、評議員会（3 回）、執行部会（13 回）を Zoom を用いたオンライン会議として開催した。また、電磁的な評議員会（メール審議）を 1 回、開催した。
- 2) 入退会の申し出への対応を行い、会員名簿の管理を行った。2020 年度末（2021 年 7 月 31 日）における会員数は以下の通りである。
正会員 960 名（うち学生会費適用者 17 名）、賛助会員 9 社、名誉会員 18 名。（なお、2020 年 7 月 31 日時点での会員数は正会員 997 名、賛助会員 9 社、名誉会員 16 名）
逝去会員：大場達之会員、楡井 久会員、松島義章名誉会員、吉田栄夫会員、竹広文明会員（2021 年 8 月以降連絡を受けた方々）
- 3) 会員登録情報の管理を行った。会員入会申込を web 上で申請できるようにした。また会員の公開情報を会員マイページ内で閲覧できるようにし、これに伴い、冊子体の会員名簿は廃止とした。
※会員マイページ内での会員公開情報は、初期設定では、氏名、会員区分、所属領域のみが公開となっているため、会員各自で所属先、メールアドレスなど公開してもよい情報の設定更新をお願いする。
- 4) 若手・学生発表賞受賞者選考、学会賞・学術賞・若手学術賞受賞者選考、論文賞・奨励賞受賞

者選考に関する業務を行った。

- 5) 選挙管理委員会を立ち上げ、2021-2022 年度会長・副会長・評議員選挙に関する業務を行った。また、第 2 回評議員会において、役員選挙規程の一部改訂を行った。
- 6) 転載許可申請に関する業務を行った（転載許可 6 件）。
- 7) シンポジウム等の共催・後援に関連する業務を行った（共催 2 件、後援 4 件）。また、外部機関との共同声明（2 件）、要望書提出（2 件）に関する業務を行った。
- 8) 第 3 回評議員会において、オンラインによる会議・講演会などの運営や会員サービスの IT 化推進を支援するため、オンライン委員会（特別委員会）を 2021-2022 年度に設置することを決定した。
- 9) 受け入れ図書・資料の整理を行った。
- 10) その他、学会活動に関する庶務業務を行った。

1-2 会計委員会（委員長：齋藤めぐみ）

- 1) 会計に関する承認業務を行った。
- 2) 新型コロナウイルス感染症の影響による経済的な負担を考慮し、学生・院生会費会員の 2020 年度会費全額免除を行った。
- 3) 2020 年度総会において、2019 年度の収支決算を報告し、2020 年度の予算案を提案した。
- 4) 2019 年度決算に対し、会計監査を受けた。
- 5) 2021 年度の予算原案を作成した。

1-3 編集委員会（委員長：北村晃寿）

- 1) 第四紀研究第 59 巻第 5 号（論説 1 編、書評 1 編、13 頁）、第 6 号（受賞記念論文 1 編、総説 1 編、書評 1 編、42 頁）を刊行した。第 59 巻の総頁数は 160 頁である（参考：第 58 巻 396 頁、第 57 巻 237 頁、第 56 巻 274 頁、第 55 巻 273 頁、第 54 巻 367 頁）。第 60 巻第 1 号（論説 1 編、12 頁）、第 2 号（論説 1 編、書評 1 編、17 頁）を刊行した。
- 2) 2021 年 8 月 19 日現在、受理済み原稿（書評を除く）は 5 編（60 巻第 3・4 号、61 巻第 1・2 号に掲載予定）、手持ち原稿は論説 9 編、総説 1 編、短報 4 編、資料 2 編である。
- 3) 「J-STAGE」の「早期公開」のオンライン公開システムを第 60 巻第 2 号の版組原稿から導入し、2021 年 4 月 30 日に公開を開始した。会員のみが無料で閲覧・ダウンロードできるエンバーゴ期間を設け、冊子体の刊行時に、「早期公開」から外すとともに、エンバーゴ期間を解除する。
- 4) 本学会のサーバーに置いている第四紀研究電

子付録を「J-STAGE Data」での公開を開始した。この導入に合わせて、第四紀研究投稿規定と第四紀研究電子付録掲載要項の一部改訂を行った。

- 5) 投稿規定の総説の刷り上がりページ数の変更(18ページから24ページ)、引用文献の文字サイズの縮小化の一部改訂を行った。
- 6) 編集委員会を16回(2020年8月21～28日、8月30日～9月5日、10月29～31日、11月13日遠隔会議、2021年1月10～18日、2月1～7日、2月10～18日、2月14～21日、2月23日～3月2日、3月3～10日、3月17～27日、6月1～7日、6月8～12日、6月13～20日、8月12日遠隔会議、8月10～18日)開催した。
- 7) 第18回編集委員会を8月12日に遠隔会議の形式で開催し、次期編集委員会への申し送り事項について審議した。

1-4 広報委員会 (委員長：白井正明)

- 1) 「第四紀通信」の編集および学会ホームページ、メーリングリストの維持管理を行った。
- 2) 「第四紀通信」第27巻5、6号、第28巻1、2、3、4号を編集し、発行した。
- 3) 上記「第四紀通信」各号の電子版(PDF版)を、それぞれ発行前月の下旬に日本第四紀学会ホームページに掲載した。
- 4) 日本第四紀学会ホームページを通じて広報、情報提供等を行った。
- 5) 日本第四紀学会会員メーリングリストを通じて広報、情報提供等を行った。2020年度の配信件数は125件(#1228～1352)。
- 6) 各委員会および各領域のメーリングリストの管理を行った。

1-5 行事委員会 (委員長：藤原 治)

- 1) 日本第四紀学会2020年大会を2020年12月26日(土)・27日(日)にオンラインで開催した。19件の口頭発表と11件のポスター発表があった。
- 2) 国際火山噴火史情報研究集会 遠隔シンポジウム「陸域アーカイブから読む環境変遷と巨大災害：防災・減災に向けて」(2021/7/24-7/25)を共催した。
- 3) 日本第四紀学会2021年大会を2021年8月27日(金)～29日(日)にオンラインで開催することとし、大阪市立大学を中心とする大会実行委員会とともに開催の準備を行った。
- 4) 学術賞受賞記念講演会を2021年8月29日

(日)にオンラインで開催する。

1-6 渉外委員会 (委員長：小荒井 衛)

- 1) 日本地球惑星科学連合(JpGU)2021年大会(5月30日～6月6日：オンライン)のセッションとして『第四紀：ヒトと環境系の時系列ダイナミクス』、『活断層と古地震』を単独及び共同提案主催し、そのほか4つのセッションに共同提案した。また、環境災害対応委員会会議(2020年10月26日：オンライン)に参加した。
- 2) 防災学術連携体のシンポジウム「東日本大震災からの十年とこれから—58学会、防災学術連携体の活動—」が2021年1月14日にオンラインで開催され、配布冊子に渉外委員長名で「『第四紀』という地球史の視点からの災害研究への取り組み」を投稿した。また、2021年4月20日にオンライン開催の臨時総会、8月6日オンライン開催の総会、8月3日にオンライン開催の第3回「防災に関する日本学術会議・学協会・府省庁の連絡会」—激化する気象災害への備え—、8月6日オンライン開催の「令和3年7月3日熱海市の土砂災害に関する緊急連絡会」に参加した。
- 3) 新しく設立されるジオパーク学術支援連合に本会も参画することにした。
- 4) 自然史学会連合の総会(2020年12月12日：オンライン)に参加した。

1-7 領域1「気候変動及び海洋の諸プロセス」(領域代表：横山祐典)

- 1) 国立台湾大学のChan-ChouShen教授と領域1の横山とで企画している国際誌ELEMENTAの人新世特集号の編集を進めた。
- 2) 愛媛大学と第四紀学会との共催で人新世シンポジウムを開催し、アカデミア以外も多く含む50名以上の参加者がオンライン参加し、活発な議論が展開された(2021年3月27日、場所：東京大学大気海洋研究所講堂を予定していたが、コロナ禍のため、全てオンライン)。
- 3) JpGUで第四紀学会の英語セッションとしても位置づけられているユニオンセッションU-13「人新世・第四紀の気候および水循環」を主催した。地球温暖化を含む環境変化について理解を深化させるためには、第四紀やアンソロポシーン(人新世)の変化について、データやモデルに基づく精度の高い研究を進める必要があるという理念から、セッションでは、東アジアに大きな影響を及ぼす水循環や環境変化をテーマに、総合的に議論し、第

一線の研究を行っている国内外の若手研究者6名に講演いただいた。アジアのみならず北米などからも研究者が参加し、活発な議論を行った。

1-8 領域2「陸上の諸プロセス」（領域代表：奥村晃史）

- 1) 2021年7月24日・25日に福岡大学理学部地球圏科学科火山・有機地質研究室および福岡大学工学部電子情報学科メディア工学研究部門（EHAI研究グループ）主催、日本第四紀学会領域2共催で、日本第四紀学会遠隔シンポジウム「陸域アーカイブから読む環境変遷と巨大災害：防災・減災に向けて」を開催した。同時に開催された国際火山噴火史情報研究集会2021-1とあわせて31件の火山災害、地震災害、斜面災害等に関する発表があり、活発な議論が行われた。
- 2) 2020年11月と2021年5月にINQUA-TERPRO関連プロジェクトのオンライン研究集会が2回開催され、領域2のメンバーが参加した。

1-9 領域3「層序と年代基準」（領域代表：里口保文）

- 1) 第四紀の年代区分に関連する解説記事（第四紀とは？、チバニアン、完新世など）を学会インターネットページへ掲載する準備を行った。予定していた内容の原稿がそろっていないものもあるため本年度は未公開とした。
- 2) 年代学および地下層序についてのシンポジウムの企画を検討した。

1-10 領域4「人類と生物圏」（領域代表：工藤雄一郎）

- 1) 縄文時代早期の遺跡と古環境をテーマとしたシンポジウムを計画中であったが、新型コロナウイルス感染症問題により中止となった。

1-11 領域5「現代社会に関わる第四紀学」（領域代表：小森次郎）

- 1) オンラインセミナーを企画していたが、実施できなかった。次年度に繰り越して実施する。

【資料2】

2020年度決算報告・会計監査報告（P24～26）

【資料3】

2021年度事業計画

1-1 庶務委員会（委員長：水野清秀）

- 1) オンライン会議を中心とした総会・評議員会・執行部会の開催に関連する業務を行う。
- 2) 入会、退会者の確認を行うとともに、会員名簿の管理を行う。
- 3) 学会賞・学術賞・若手学術賞の受賞者選考および論文賞・奨励賞の受賞者選考に関する業務を行う。
- 4) 名誉会員候補者選考委員会を設置し、名誉会員と功労賞の受賞者選考に関する業務を行う。
- 5) オンライン委員会（特別委員会）を設置し、関係する委員会・領域等とともにオンラインによる会議・講演会などの運営や会員サービスのIT化推進を進める。
- 6) 転載許可申請への対応を行う。
- 7) 学会・シンポジウム等の共催・後援に関連する業務を行う。
- 8) 必要に応じて規程・内規の改訂・制定を行う。
- 9) その他学会活動に関する庶務業務を行う。

1-2 会計委員会（委員長：齋藤めぐみ）

- 1) 会計に関する承認業務を行う。
- 2) 2021年度総会において、2020年度の収支決算を報告し、2021年度の予算案を提案する。
- 3) 会計監査を受ける。
- 4) 会費減免に関する業務を行う。
- 5) 現状の問題点と長期的な財政事情を考慮し、会計の観点から学会の運営を検討する。
- 6) 在庫物品の管理を行う。

1-3 編集委員会（委員長：荻谷愛彦）

- 1) 「第四紀研究」第60巻第3号、4号、第61巻第1号、2号を編集し、定期刊行する。また、J-STAGEを通じて、電子ジャーナルとしての刊行を行う。
- 2) 「第四紀研究」編集・出版に関わる諸課題を整理し、順次その検討・見直しを進め、可能なものから改善を実施する。

1-4 広報委員会（委員長：那須浩郎）

- 1) 「第四紀通信」第28巻5号、6号、第29巻1号、2号、3号、4号を編集し、発行する。
- 2) 上記「第四紀通信」各号の電子版（PDF版）を、それぞれ発行前月の下旬に日本第四紀学会ホームページに掲載する。各ファイルを保存し、アーカイブ化を継続する。

- 3) 日本第四紀学会ホームページを管理し、広報、情報提供、アウトリーチ活動等を行う。
- 4) 日本第四紀学会会員メーリングリストを通じて各種情報提供等を行う。
- 5) 各委員会および各領域のメーリングリストの管理を行う。

1-5 行事委員会（委員長：工藤雄一郎）

- 1) 2021年大会・発表会をオンラインで開催する。
- 2) 2022年大会（会場は静岡の予定）の準備と関係者と調整して行う。
- 3) 学術賞受賞記念講演会を開催する。

1-6 渉外委員会（委員長：山田和芳）

- 1) 日本地球惑星科学連合における日本第四紀学会の認知度と活動度を高めるために、連合大会セッションについて、『第四紀：ヒトと環境系の時系列ダイナミクス』と、『活断層と古地震』を第四紀学会が開催し、第四紀学会員の発表の場を用意するとともに、第四紀学に関連するセッションとの連携・共催を積極的にすすめる。
- 2) 防災学術連携体、自然史学会連合等、国内関連学協会との連携を高めていく。

1-7 領域1「気候変動及び海洋の諸プロセス」（領域代表：田村 亨）

- 1) 国際誌 ELEMENTA の人新世特集号の編集を進め、出版を行う。
- 2) 2022年5月に行われる JpGU Meeting において「人新世・第四紀の気候および水循環」を主催する。
- 3) Anthropocene Working Group の Workshop での別府湾 GSSP プロポーザルチームの発表を9月22日に予定。
- 4) The Anthropocene Review での特集号に別府湾 GSSP チームを代表し領域1の加会員が論文出版を予定。
- 5) 2021年秋～冬に、太平洋やアジア縁辺海の海洋掘削にむけてのシンポジウムを予定。
- 6) Lithosphere でのアジア～太平洋の古気候・古海洋分野の特集号を企画。

1-8 領域2「陸上の諸プロセス」（領域代表：堀和明）

- 1) 陸上の諸プロセスに関するシンポジウムを開催し、第四紀研究の特集号に成果を公表する。
- 2) JpGU 大会に向けて、陸上の諸プロセスに関連したセッションの提案を検討する。
- 3) INQUA TERPRO コミッションの研究プロ

ジェクトに領域メンバーの参加をうながす。

1-9 領域3「層序と年代基準」（領域代表：卜部厚志）

- 1) 第四紀の年代区分に関連する解説記事について、「地質時代区分と GSSP」、「日本の国際的第四系」、「玄武洞」の内容について、学会インターネットページ上で順次公開する。他に「チバニアン」と「水月湖」の解説について原稿を集める。
- 2) 領域に関連するシンポジウム等について、社会状況をみながら実施方法も含めて具体的な実施案を検討する。

1-10 領域4「人類と生物圏」（領域代表：海部陽介）

- 1) 縄文時代早期の遺跡と古環境をテーマとしたシンポジウムを開催すべく準備する。オンライン開催やオンラインと対面を同時に行うハイブリッド形式での開催など、実現に向けて具体的な検討を進める。
- 2) オンライン—大阪大会での公開シンポジウム「近畿における歴史時代の自然環境」を企画し、開催する。

1-11 領域5「現代社会に関わる第四紀学」（領域代表：目代邦康）

- 1) オンラインセミナー「現代社会における第四紀学」の開催。
- 2) 第四紀研究特集号「学校教育とジオパーク（仮）」の編集と刊行。
- 3) 一般向け普及書の企画。

【資料4】

2021年度予算案（P27）

【資料2】2020年度決算報告（会計委員長：齋藤めぐみ）

2020年度収支会計報告
(2020年8月1日～2021年7月31日)

収入の部					(単位：円)
科 目	予算額①	7月31日現在②	増減②-①	収入率②/①	摘 要
会費収入	9,029,000	8,865,496	-163,504	98.2%	正会員943名、学生会員17名、賛助9社(2021年7月31日現在)
正会員会費収入	8,829,000	8,665,496	-163,504	98.1%	通常会員会費8,600,093円 学生会員会費10,000円 海外会員会費55,403円
賛助会員会費収入	200,000	200,000	0	100.0%	20,000円×9社(10口)
誌代	1,000,000	633,600	-366,400	63.4%	定期雑誌購入、Back No
別刷代・超過頁代収入	550,000	216,610	-333,390	39.4%	59巻4号～59巻6号・60巻1号 別刷・カラー・超過頁代等
雑収入	100,000	153,685	53,685	153.7%	デジタルブック、JST、著作権料収入等
利子収入	1,000	288	-712	28.8%	預金利息
広告料収入	0	0	0		
役員選挙積立金取崩収入	250,000	250,000	0	100.0%	
INQUA対策積立金取崩収入	0	0	0		
名簿作成積立金取崩収入	450,000	450,000	0	100.0%	
予備費積立金取崩収入	0	0	0		
収入合計	11,380,000	10,569,679	-810,321	92.9%	
前期繰越金	18,061,902	18,061,902	0	100.0%	
合計	29,441,902	28,631,581	-810,321	97.2%	

支出の部					(単位：円)
科 目	予算額①	7月31日現在②	増減②-①	執行率②/①	摘 要
会誌発行費	3,901,200	2,910,826	-990,374	74.6%	
印刷費	2,250,000	1,459,700	-790,300	64.9%	第四紀研究 59巻4号～6号、60巻1号～2号
編集費	300,000	206,476	-93,524	68.8%	第四紀研究 59巻4号～6号、60巻1号～2号
編集人件費	1,201,200	1,201,200	0	100.0%	編集書記手当
別刷印刷費	150,000	43,450	-106,550	29.0%	第四紀研究 59巻4号～6号、60巻1号
会誌・会報発送費	800,000	485,411	-314,589	60.7%	第四紀研究・通信 送料等
会報発行費	785,000	890,573	105,573	113.4%	第四紀通信 27巻4号～6号、28巻1号～3号
印刷費	500,000	468,820	-31,180	93.8%	
編集費	75,000	220,253	145,253	293.7%	第四紀通信編集費、PC購入代(136,500円)等
編集人件費	210,000	201,500	-8,500	96.0%	第四紀通信編集アルバイト代
学会HP運営費	170,000	154,820	-15,180	91.1%	HP更新アルバイト代、ドメイン更新料等
大会運営準備金	840,000	387,370	-452,630	46.1%	2020年オンライン大会(7,370円)、2021年オンライン大会運営準備金(380,000円)
巡検準備金	100,000	0	-100,000	0.0%	2021年大会(オンライン大会の為、計上無し)
講演会・シンポジウム費	100,000	0	-100,000	0.0%	シンポジウム・受賞記念講演開催費
予稿集印刷費	300,000	0	-300,000	0.0%	2021年大会講演要旨集(オンライン大会の為、計上無し)
学会賞等顕彰費	130,000	106,694	-23,306	82.1%	2020年賞状作成費(学術賞・功労賞・若手学術賞・論文賞・名誉会員・若手学生発表賞)、若手学術賞副賞
会議費	60,000	42,790	-17,210	71.3%	Zoom利用料
通信費	380,000	211,176	-168,824	55.6%	会費請求書送付費、事務通信費等
旅費・交通費	100,000	3,694	-96,306	3.7%	会計監査会交通費(執行部会等はオンライン開催の為計上無し)
印刷費	440,000	172,321	-267,679	39.2%	学会専用封筒、コピー代等
業務委託費	2,400,000	2,274,938	-125,062	94.8%	事務委託費等
領域活動費	750,000	0	-750,000	0.0%	
領域1	150,000	0	-150,000	0.0%	
領域2	150,000	0	-150,000	0.0%	
領域3	150,000	0	-150,000	0.0%	
領域4	150,000	0	-150,000	0.0%	
領域5	150,000	0	-150,000	0.0%	
INQUA対策費	0	0	0		
役員選挙費	600,000	367,272	-232,728	61.2%	選挙システム利用料、会告印刷費、選挙関連送付費用、事務費用等
名簿作成費	450,000	220,000	-230,000	48.9%	マイページ会員検索機能初期構築費、運用サーバ費
INQUA対策積立金繰入支出	0	0	0		
役員選挙費積立金繰入支出	0	0	0		
名簿作成積立金繰入支出	0	0	0		
予備費積立金繰入支出	0	0	0		
加盟学協会分担金支出	60,000	50,000	-10,000	83.3%	地球惑星科学連合、自然史学会連合分担金、防災学術連携体
国際科学技術コンテスト協賛金支出	50,000	50,000	0	100.0%	国際地学オリンピック協賛金
雑費	50,000	15,665	-34,335	31.3%	振込手数料等
予備費	30,000	0	-30,000	0.0%	
支出合計	12,496,200	8,343,550	-4,152,650	66.8%	
次期繰越金	16,945,702	20,288,031	3,342,329	119.7%	
合計	29,441,902	28,631,581	-810,321	97.2%	

貸借対照表
(2021年7月31日現在)

(単位：円)

借 方		貸 方	
科 目	金 額	科 目	金 額
流動資産		流動負債	
郵便振替	6,547,173	前受会費	1,105,000
小口現金	714,608	未払金	1,020,988
普通預金	14,233,033	小 計	2,125,988
現金(事務局)	17,306	正味財産	
未収金	151,899	名簿作成積立金	150,000
固定資産		役員選挙積立金	0
定期預金	10,000,000	INQUA対策積立金	300,000
		予備費積立金	8,800,000
		次期繰越金	20,288,031
		(前期繰越金)	18,061,902)
		(当期収支差額)	2,226,129)
		小 計	29,538,031
合 計	31,664,019	合 計	31,664,019

財産目録
(2021年7月31日現在)

(単位：円)

資 産 の 部		金 額
科 目	摘 要	金 額
郵便振替	郵便局(年会費振込専用口座)	6,547,173
小口現金	編集書記手許金	714,608
普通預金	みずほ銀行早稲田支店	14,025,857
	三井住友信託銀行本店営業部	207,176
現金	事務局手持ち金	17,306
未収金	別刷代・超過頁代収入	151,899
流動資産合計		21,664,019
定期預金	三井住友信託銀行本店営業部	10,000,000
固定資産合計		10,000,000
合 計		31,664,019

負 債 の 部		金 額
科 目	摘 要	金 額
前受会費	2021年度以降年会費	1,105,000
未払金	国際地学オリンピック協賛金	50,000
	旅費交通費	5,208
	会誌・会報印刷費用等	365,780
	名簿作成費	220,000
	2021年大会運営準備金	380,000
合 計		2,125,988

正味財産の部		金 額
科 目	摘 要	金 額
名簿作成積立金	名簿作成積立金	150,000
役員選挙積立金	役員選挙積立金	0
INQUA対策積立金	INQUA対策積立金	300,000
予備費積立金	予備費積立金	8,800,000
次期繰越金		20,288,031
	前期繰越金	18,061,902
	当期収支差額	2,226,129
合 計		29,538,031

2020年度会計監査報告（会計監査：久保純子・松浦秀治）

日本第四紀学会

会長 齋藤 文紀 殿

2020年度会計監査報告書

日本第四紀学会 2020年度収支決算報告書（2020年8月1日～2021年7月31日）の監査を行い、予算の執行、帳簿、証票の整理等、正常適正に処理されていることを確認いたしました。


ここにご報告いたします。

以上

2021年8月 19日

会計監査 久保純子 

2021年8月 19日

会計監査 松浦秀治 

【資料4】2021年度予算案（会計委員長：齋藤めぐみ）

2021年度予算案
(2021年8月1日～2022年7月31日)

収入の部 (単位：円)

科 目	2020年度予算額	7月31日現在	2021年度予算案	摘 要
会費収入	9,029,000	8,865,496	8,772,000	
正会員会費収入	8,829,000	8,665,496	8,572,000	正会員943名、学生会員17名、賛助9社(2021年7月31日現在)
賛助会員会費収入	200,000	200,000	200,000	20,000円×9社(10口)
誌代	1,000,000	633,600	700,000	定期雑誌購入、Back No
別刷代・超過頁代収入	550,000	216,610	250,000	60巻3号～4号、61巻1号～2号別刷代等
雑収入	100,000	153,685	150,000	JST、著作権料収入等
利子収入	1,000	288	1,000	預金利息
広告料収入	0	0	0	大会予稿集広告掲載料(2021年大会は広告無し)
役員選挙積立金取崩収入	250,000	250,000	0	
INQUA対策積立金取崩収入	0	0	0	
名簿作成積立金取崩収入	450,000	450,000	150,000	
予備費積立金取崩収入	0	0	0	
収入合計	11,380,000	10,569,679	10,023,000	
前期繰越金	18,061,902	18,061,902	20,288,031	
合計	29,441,902	28,631,581	30,311,031	

支出の部 (単位：円)

科 目	2020年度予算額	7月31日現在	2021年度予算案	摘 要
会誌発行費	3,901,200	2,910,826	3,101,200	
印刷費	2,250,000	1,459,700	1,500,000	第四紀研究 60巻3号～4号、61巻1号～2号 各1,200部
編集費	300,000	206,476	300,000	
編集人件費	1,201,200	1,201,200	1,201,200	編集書記手当
別刷印刷費	150,000	43,450	100,000	第四紀研究 60巻3号～4号、61巻1号～2号
会誌・会報発送費	800,000	485,411	600,000	第四紀研究 60巻3号～4号、61巻1号～2号
会報発行費	785,000	890,573	785,000	
印刷費	500,000	468,820	500,000	第四紀通信 28巻4号～6号、29巻1～3号 各1,100部
編集費	75,000	220,253	75,000	編集ソフト契約料等
編集人件費	210,000	201,500	210,000	第四紀通信編集アルバイト代
学会HP運営費	170,000	154,820	170,000	HP更新アルバイト代、ドメイン更新料等
大会運営準備金	840,000	387,370	380,000	2022年大会運営準備金
巡検準備金	100,000	0	100,000	2022年大会
講演会・シンポジウム	100,000	0	50,000	シンポジウム・受賞記念講演会開催費
予稿集印刷費	300,000	0	0	2021オンライン大会
学会賞等顕彰費	130,000	106,694	320,000	賞状作成費・副賞等
会議費	60,000	42,790	60,000	ZOOMライセンス利用代、会議室使用代
通信費	380,000	211,176	380,000	会費請求書発送郵税、事務通信費等
旅費・交通費	100,000	3,694	100,000	執行部会・委員会等交通費
印刷費	440,000	172,321	350,000	学会専用封筒、コピー代
業務委託費	2,400,000	2,274,938	2,400,000	事務委託費概算払分
領域活動費	750,000	0	750,000	15万円×5領域
領域1	150,000	0	150,000	
領域2	150,000	0	150,000	
領域3	150,000	0	150,000	
領域4	150,000	0	150,000	
領域5	150,000	0	150,000	
INQUA対策費		0	0	
役員選挙費	600,000	367,272	0	
名簿作成費	450,000	220,000	—	
INQUA対策積立金繰入支出	0	0	0	
役員選挙費積立金繰入支出	0	0	200,000	
名簿作成積立金繰入支出	0	0	—	
予備費積立金繰入支出	0	0	1,200,000	
加盟学協会分担金支出	60,000	50,000	50,000	地球惑星科学連合、自然史学会連合分担金、防災学術連携体
国際科学技術コンテスト協賛金支出	50,000	50,000	50,000	国際地学オリンピック協賛金
雑費	50,000	15,665	50,000	振込手数料等
予備費	30,000	0	0	
支出合計	12,496,200	8,343,550	11,096,200	
次期繰越金	16,945,702	20,288,031	19,214,831	
合計	29,441,902	28,631,581	30,311,031	

【資料 5】2021-2022 年度役員・委員一覧

(下線部は 2021 年度第 1 回評議員会で承認された会員)

会長 鈴木毅彦

副会長 北村晃寿 須貝俊彦

会計監査 三浦英樹 横山祐典

領域 1 領域代表 田村 亨
領域幹事 オブラクタ ステューブン フィリップ、久保田好美、加 三千宣、坂下 渉、平林頌子

領域 2 領域代表 堀 和明
領域幹事 吾妻 崇、石村大輔、奥野 充、荻谷愛彦、久保純子、佐藤善輝、宍倉正展、丹羽雄一、藤原 治

領域 3 領域代表 卜部厚志
領域幹事 青木かおり、岡田 誠、菅沼悠介、長橋良隆、兵頭政幸、水野清秀

領域 4 領域代表 海部陽介
領域幹事 井上 淳、江口誠一、工藤雄一郎、齋藤めぐみ、高原 光、中塚 武、那須浩郎、百原 新

領域 5 領域代表 目代邦康
領域幹事 石原与四郎、植木岳雪、小荒井 衛、前杢英明、三田村宗樹、山田和芳

庶務委員会 委員長 水野清秀
委員 谷川晃一郎、佐藤善輝、西澤文勝、江口誠一、前杢英明

会計委員会 委員長 齋藤めぐみ
委員 坂下 渉、石村大輔、立石 良、植木岳雪

編集委員会 委員長 荻谷愛彦
委員 加 三千宣、青木かおり、下岡順直、安江健一、松多信尚、井上 淳、亀井 翼、石原与四郎

広報委員会 委員長 那須浩郎
委員 丹羽雄一、竹下欣宏、オブラクタ ステューブン フィリップ、小森次郎

行事委員会 委員長 工藤雄一郎
委員 池原 実、箱崎真隆、奥野 充、目代邦康

渉外委員会 委員長 山田和芳 (JpGU プログラム)
委員 平林頌子 (JpGU 環境災害対応委員：環境)、卜部厚志 (JpGU 環境災害対応委員：災害)、百原 新 (自然史学会連合)、小荒井 衛 (JpGU プログラム、防災学術連携体)、小森次郎 (地学オリンピック)、植木岳雪 (ジオパーク)

オンライン委員会	委員長 久保田好美 委員 吾妻 崇、菅沼悠介、工藤雄一郎、目代邦康
法務委員会（常任委員）	竹村恵二、奥村晃史、松浦秀治、池原 研、里口保文 (委員長は常任委員の互選により選任)
2021 年度学会賞選考委員会	委員長 鈴木毅彦 委員 齋藤文紀、藤原 治、高原 光、遠藤邦彦
2021 年度論文賞選考委員会	委員長 兵頭政幸 委員 三田村宗樹、オブラクタ スティーブン フィリップ、 穴倉正展、中塚 武
2021 年度名誉会員候補者選考委員会	委員長 百原 新 委員 岡崎浩子、小岩直人、米田 穰、小荒井 衛
2021 年度評議員会議長	久保純子
2021 年度評議員会議長代理	岡田 誠、長橋良隆

◆日本第四紀学会 2021 年度総会議事録

日 時：2021 年 8 月 28 日(土) 15:40～18:00(授賞式を含む)

方 法：Zoom システムを用いたオンライン会議

藤原 治前行事委員長による開会の辞、鈴木毅彦会長の挨拶に続き、定足数の確認が行われ、総会成立条件を満たしていることが水野清秀庶務委員長より報告された（最終的な参加者数は、正会員 102 名、委任状 114 通：すべて議長委任）。議長に吾妻 崇会員を選出し、大会実行委員会による総会資料提示の元、下記の議事が進められた。最後に北村晃寿副会長の挨拶で総会は終了し、前々英明庶務委員の司会による授賞式に引き継がれた。

(1) 2020 年度事業報告

資料 1（2021 年度第 1 回評議員会資料と同じ、以下同様）に基づき、水野庶務委員長が説明を行い、承認された。

(2) 2020 年度決算報告・会計監査報告

齋藤めぐみ会計委員長から資料 2 に基づき、決算報告が行われた。また、2019-2020 年度会計監査・久保純子会員から会計監査報告が行われた。これらの報告は承認された。

(3) 学会賞・学術賞・若手学術賞受賞者報告

2020 年度第 3 回評議員会にて決定された学会賞・学術賞・若手学術賞受賞者とその選考経過並びに受賞理由について、水野庶務委員長が説明を行った（詳細は本号の学会賞・学術賞・若手学術賞受賞者選考報告参照）。

(4) 論文賞・奨励賞受賞論文・受賞者選考報告

2020 年度第 3 回評議員会にて決定された論文賞・奨励賞の受賞論文・受賞者とその選考経過並びに受賞理由について、水野庶務委員長が説明を行った（詳細は本号の論文賞・奨励賞受賞論文・受賞者選考報告参照）。

(5) 2021 年度第 1 回評議員会報告

8月26日(木)にオンラインにて行われた2021年度第1回評議員会の報告が、水野庶務委員長によって行われた(詳細は本号の2021年度第1回評議員会報告参照)。

(6) 2021年度事業計画

資料3に基づき、水野庶務委員長が説明を行い、賛成多数で承認された。

(7) 2021年度予算案

資料4に基づき、齋藤会計委員長が説明を行い、賛成多数で承認された。

◆日本第四紀学会 2020年度第13回執行部会(新旧合同) 議事録

日時: 2021年7月15日(木) 10:00~12:30

方法: Zoomシステムを使ったオンライン会議

出席者: 鈴木毅彦(現副会長、次期会長)、水野清秀(現次期庶務委員長)、齋藤めぐみ(現次期会計委員長)、北村晃寿(現編集委員長、次期副会長)、藤原 治(現行事委員長)、白井正明(現広報委員長)、小荒井 衛(現渉外委員長)、横山祐典(現領域1代表)、奥村晃史(現領域2代表)、里口保文(現領域3代表)、須貝俊彦(次期副会長)、荻谷愛彦(次期編集委員長)、那須浩郎(次期広報委員長)、山田和芳(次期渉外委員長)、田村 亨(次期領域1代表)、堀 和明(次期領域2代表)、卜部厚志(次期領域3代表)、海部陽介(次期領域4代表)、目代邦康(次期領域5代表)
オブザーバー: 久保田好美(次期オンライン委員長)、永峯菜穂子(事務局: 春恒社)

主な報告事項

- (1) 2021-2022年度会長・副会長・評議員・執行部会員へ委嘱状を送付した。
- (2) 第四紀研究の電子付録のJ-STAGE Dataへの掲載を完了した。
- (3) 2021年大会のプログラムを確定した。口頭・ポスター計50件。
- (4) ホームページにサイトマップを掲載した。

(5) 遠隔シンポジウム「陸域アーカイブから読む環境変遷と巨大災害: 防災・減災に向けて」を、領域2「陸上の諸プロセス」の企画として、国際火山噴火史情報研究集会「EHAI2021-1」との共催で7月24日(土)~7月25日(日)に開催する。

(6) 2021-2022年度各委員会の領域から推薦する委員は、ほぼ確定した。

主な審議事項

- (1) 各常設委員会・領域の新旧での引継ぎ内容と課題の確認を行った。庶務委員会の業務が多いため、将来的に会議関係、顕彰関係の独立した委員会を作るかどうか、新年度に入ってから大会(総会)までの時間が少ないことから旧年度の報告事項と新年度の計画をまとめる時間が十分確保できないため、年度の切り替え時期を早められるか、予算配分についてはいくつか見直しが必要であること、「第四紀研究」や「第四紀通信」のオンライン化、来年の大会の候補地、各領域を中心とする来年度のイベント計画などについて検討する必要があることが指摘された。
- (2) 論文賞・奨励賞の受賞対象者や年齢などの点を中心に顕彰規程及び関連する内規を見直すことが提案され、その改訂案を庶務委員長が作成して評議員会に諮ることとした。

◆日本第四期学会 2021 年度第 1 回執行部会（新旧合同）議事録

日 時：2021 年 8 月 26 日（木）9:30～10:00

方 法：Zoom システムを使ったオンライン会議

出席者：鈴木毅彦（会長）、北村晃寿（副会長）、須貝俊彦（副会長）、水野清秀（庶務委員長）、荻谷愛彦（編集委員長）、工藤雄一郎（行事委員長・旧領域 4 代表）、那須浩郎（広報委員長）、山田和芳（渉外委員長）、堀 和明（領域 2 代表）、卜部厚志（領域 3 代表）、高原 光（旧副会長）、藤原治（旧行事委員長）、横山祐典（旧領域 1

代表）、奥村晃史（旧領域 2 代表）

オブザーバー：久保純子（2019-2020 年度会計監査）、吾妻 崇（旧庶務委員会）

2021 年度第 1 回評議員会における進行の手順や説明者、定足数について、事前確認を行った。また 2021 年度総会における進行の手順、説明者、質問・採決の方法、授賞式などについても事前確認を行った。

.....

★★★ 情報発信を希望される方へお願い ★★★

日頃から日本第四紀学会のコミュニティへ情報提供くださり、ありがとうございます。提供された情報の円滑な配信を目指して、広報委員会から皆様へ、以下のお願いを致します。

- (1) 情報発信の手段として、ML の積極的な使用をお願いします。
 - 1) メール本文に配信内容のタイトルと簡単な情報を書いて広報委員会アドレス (jaqua-koho(at)quaternary.jp) へご投稿ください。
メール本文の情報は常識的な長さでお願い致します。
 - 2) 広報委員会にて文言の微修正を行う、または投稿した方に情報の修正・追加をお願いすることがあります。
 - 3) イベント等の周知などで当該イベントの URL がある場合、その URL も載せてください (ただし上記の通り、メール本文にも簡単な情報も載せるよう、お願い致します)。
 - 4) 第四紀学にほとんど関連しないものについては配信をお断りすることがあります。
 - 5) 学会、研究集会のお知らせでも、第四紀学会の会員間で参加費等に不平等が生じるものは配信しませんので、ご了承ください。
 - 6) 添付ファイルは ML に配信致しません。
- (2) 第四紀通信への掲載依頼、日本第四紀学会 HP への掲載依頼も受け付けておりますが、基本的に、主催・後援イベントなど第四紀学会として会員に広く周知する必要があると認められる情報、「公募・助成」情報 (こちらは HP のみの掲載となります) 等に限られます。詳しくは広報委員会アドレス宛に、個別にご相談ください。
- (3) 第四紀通信の表紙用の写真 (または作成した画像) を受け付けています。詳細は第四紀通信 27 巻 6 号の巻末をご覧ください。
- (4) 第四紀通信は偶数月 1 日刊行予定としていますが、情報をなるべく早く皆様にお届けできるように、奇数月下旬に版下が完成した段階でホームページに掲載していますので、ご利用ください。

日本第四紀学会広報委員会：那須浩郎・オブラクタ スティーブン フィリップ・丹羽雄一・竹下欣宏・小森次郎
広報書記：岩本容子・奥村公弥子

日本第四紀学会ホームページ <http://quaternary.jp/> から第四紀通信バックナンバーの PDF を閲覧できます。

日本第四紀学会事務局

〒169-0072 東京都新宿区大久保 2 丁目 4 番地 12 号 新宿ラムダックスビル

株式会社春恒社 学会事業部内

E-mail : daiyonki(at)shunkosha.com 電話 : 03-5291-6231 FAX : 03-5291-2176